尾崎喜八資料

第 10 号

特集　訳詩抄——未刊行、草稿詩篇拾遺

月夜／ライナー・マリア・リルケ(墨書)——2

麦畑での無言の返事／尾崎喜八——3

尾崎喜八への旅　その四／伊藤海彦——4

桃色のあぢさゐ／ライナー・マリア・リルケ(墨書)——7

*

資料と研究／尾崎喜八　訳詩抄——8

ヴィクトル・ユーゴー／エミール・ヴェルハーラン／マルセル・マルチネ／
マルク・ド・ラレギー／ジャン・ド・サンプリ／ピエール・ジャン・ジューヴ／
ジュール・ロマン／ジョルジュ・デュアメル／シャルル・ヴィルドラック／
エルンスト・トラー／ヘルマン・ヘッセ／イヴォンヌ・エルマン・ジルソン／
アンドレ・スピィル／ルネ・アルコス／カルル・サンドバーク／ジャン・アジャルベール／
ヘンリー・ヘーク／エドヴァルト・メーリケ／スティーヴン・スペンダー

未発表草稿「カロッサ詩集」譯稿——23

尾崎喜八訳詩の精神史／嘉納忠明——28

*

尾崎喜八資料　総目録(創刊号～9号)——32

富士見町・尾崎喜八記念施設についての進行報告——34

*

平成五年のできごと／編集室から——35

*

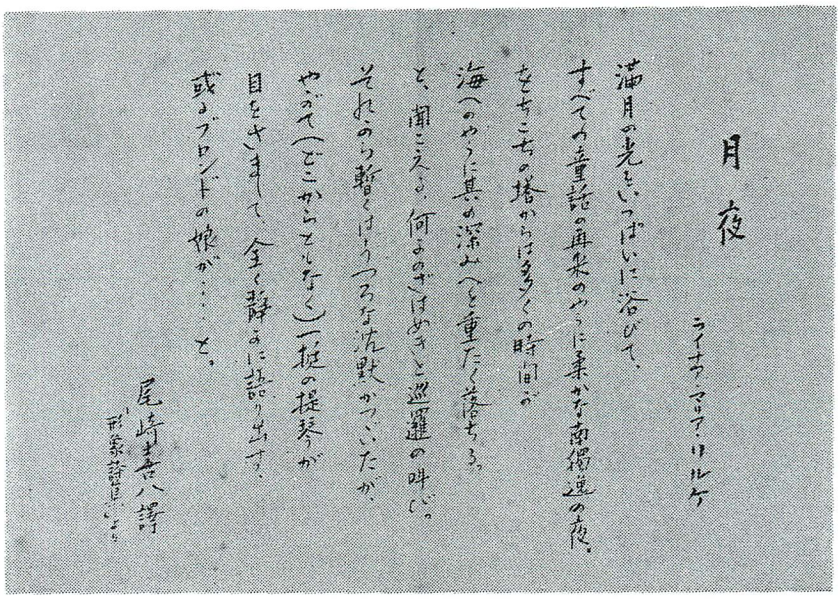
表紙題字／草野心平

尾崎喜八研究会

1994 年 2 月

ロマン・ロランの会によるシャルル・ヴィルドラック夫妻訪日歓迎パーティー
「大正15年、日本橋ソーダ・ファウンテンにて。前列右から、高田博厚、ヴィルドラック夫人、ヴィルドラック、倉田百三、同夫人。後列右から、尾崎喜八、吉田泰司、上田秋夫、片山敏彦、高村光太郎、今井武夫。」（掲載写真の裏に書かれた、尾崎喜八自筆の覚書）。

なお、このパーティーを主催したロマン・ロランの会は、同年1月に発足したいわゆる「ロマン・ロラン友の会」とは別の会である（嘉納忠明氏の「附記」を参照）。



月夜

ライナー・マリア・リルケ

満月の光をいっぱいに浴びて、
すべての童話の再来のように素晴らしい南国遥の夜、
そこかしこの塔からはるかの時間が
海のように真の深山へと重たく落ちる。
と、聞こえる。何かがはめきと巡邏の叫び。
それから暫くはうつろな沈黙がつづいたが、
やがて（どこからとなく）一挺の提琴が
目をさまして、全く静かに語り出す、
或るブロンドの娘が……と。

尾崎喜八譯
「形象詩集」より

尾崎喜八によるリルケの詩「月夜」の墨書（伊藤海彦氏蔵）。

麦畑での無言の返事

そのかみの「アベイ」の詩人等に

尾崎喜八

或年の春の暮、夏のはじめに、
巴里の真中、セイヌ街から日本へ来た一人の
詩人が
風薫る武蔵野の畑へ立つた。
彼はゴール人の身をかがめて馬鈴薯の葉にさはり
そよぎたつ新緑の大麦をしごき、
又一摑みの土壌をその大きな手の平へ載せた
よく耕され、よく肥えた武蔵野の土は、
このイール　ド　フランスの詩人の指の間で、
緻密なバタか乾いたカステラかのやうに溶け
砕けた。
やがて彼は立ち上がつて云つた、
「親愛なヲザキ、此処の土は非常にいゝ！」
と。私はほゝえんだ。

私はほゝえんだ、
子供のやうにまじめな其の詩人の眼に向つて
一つの花のやうな思想が私の裏に咲いたから
私は斯う云ひたかつたのだ、
「さうです、親しい友よ。しかし若しも私達お
互が
仏蘭西の農夫であり日本の農夫であつたなら
互の土地や作物の肥料について
どんなにもつと善く話しあふ事が出来るだら
う」と。

さうだ。
私には其時それを云ふ事が出来なかつたのだ
もうかなり暑くなつた田舎の太陽や、
遠く五月幟の吹きながれる初夏の空の下、
風さへ薫る新緑の日の海のやうな麦畑で
眼前に髣髴した至福の夢を、
私の仕事がいつも其れから鼓舞される
万人交通の聖なる夢想を。

しかし本当にその夢が実現されたならば、
あらゆる土地と国々との百姓が
（そしてこれは単に百姓だけの事ではない！）
互に自由に交通しあふ時が来たならば、
金髪の農夫と黒髪の農夫とは同じ節だらけな
手をとりあつて
それぞれの実際の経験や、智識や、
新らしいもくろみを打明けあへるのだ
国から国へ、種子や苗木のにぎやかな交換が
初まり、
珍らしい農具や家具が試験的に使はれるだ
らう。
そして其れが適応する土地土地へ弘まるだ
らう。
知る事の範囲が広くなり、無駄がはぶかれ、
能率が上がり、収獲や利益が増すだらう。
そして仕事そのものが今よりももつと楽しく
日光の中で悦び多いものとなるだらう。
また美が、異なる国の異なる美がとりいれら
れて、
彼等の生活に入りまじり、浸潤し、

其処に又全く新らしい実を結ぶだらう。
そして、他国の人の喜びや苦しみを
我事のやうに感じるとゲーテの云つた
あの「世界人」の特質が到るところ当然なも
のとなるだらう！

友よ、優しい心と素朴な手とを持つ友よ、
人の心に咲く花の意味を誰よりもよく知つて
ゐる詩人よ、
此国の初夏の武蔵野で、
正午の日光や風にかゞやく麦の中で、
微笑に代へて私が与へた無言の返事を
あの時君は斯う解釈してくれてもよかつた
のだ。

（「詩文学」昭2・10）

「巴里の真中、セイヌ街から日本に来た一人の詩人」とはシャルル・ヴィルドラックの事である。大正十五年五月、東京上高井戸の畑中の小さい家に、ロマン・ロランの友情の使節として僧院派の詩人、「ミシェル・オークレール」「商船テナシティー」の作者シャルル・ヴィルドラックとその夫人を迎えた事は、この家の私達の以後の生活に一層確かな信仰と新たな光とを招来した。という意の事を『音楽への愛と感謝』の中「畑中の小さい巣」に書いている。来日の前後に多くの熱烈な書簡が取り交され、僧院派の詩人達が次々に紹介された。後に長い間音信が途絶えるが尾崎の書棚には彼等の著作が次々に納められ、終生心の師として友として渝わる事がなかった。同書中「ヴィルドラックの死」にも書かれている。

尾崎喜八への旅

その四

伊藤海彦

「森のなかの庭に面した古い別荘の裏座敷。いく間をへだててここまでは人の声もとどかない。賑やかな小鳥の合唱にほのぼの明ける初夏の朝と、新緑に重い深遠な昼と、星ぞらの下の欝蒼たる夜。こうして日が過ぎ、週が過ぎる。私はおもむろに恢復期をたどっている。傷ついた心と疲労した肉体とが虚脱の底から緩やかな曲線をえがいて昇る、あの甘美な、感傷的な、明暗も柔かな恢復期を」

この「恢復期」という散文は喜八が富士見分水荘に暮らし始めてから書き下ろした初めての本『高原暦日』に収められている。詩も十三篇「新詩篇」として併せ収められているが、散文は九篇、富士見への到着から始まってこの詩人が傷んだ心身から徐々にそして見事に恢復していくさまがまざまざと見てとれる文章である。喜八はこれらの散文を出版するあてもなく、雑誌に発表するという目的もなしにただ自分のために書いた。書かねばならぬという思いから、詩人は比較的短い…だが深い思いをこめてこの仕事を自らに課し、少しずつ書きあげていくことで悪夢からの恢復と再生を手にしたのだ。

昭和二十二年の晩春から冬にいたるまでのこれらの散文のすべてではないと思うが、その中の何篇かは前出の引用にある分水荘の裏座敷で書かれたはずである。ところで、これらの作品は翌二十三年の三月にあしかび書房から旧稿の「たてしなの歌」を加えて上梓された。あしかび書房というのは上諏訪駅に近い本町通りにある博信堂の藤森栄一さんの、この本を出すにあたっての命名で、その後出版活動を続けることはなかったように思う。出版に至る経緯はくわしく覚えていないが、喜八のことを知った藤森さんがかねてから本を出したいと考えていたのでぜひということになったのではなかったろうか。藤森さんの店は古くからのものだが、新刊書と文房具を扱うふつうの小売店であった。藤森さんは独自の考古学の研究者で縄文の人たちがすでに農耕を営んでいたという説を当時からもっていた。しかしよくあることで狭量の学界からは素人の想像と白い眼で見られていたようだった。その後彼は何冊かのすぐれた本を書き、今や彼の説ははっきりと認められるようになった。

『高原暦日』が本になるということは苦しい生活をしていた喜八にとって非常に嬉しかったにちがいない。そのことを私に告げたときの生き生きとした表情を私ははっきり覚えている。たしか集中の「森のオルフォイス」だったと思うが、たまたまそれを書きあげたばかりの所へ伺った私に、喜八は原稿を読んで聞かせて下さった。その後の東京上野毛でも、北鎌倉でも、そんな好運にめぐりあうことはしばしばあったが、この時の詩人の自作を読んだ声音には格別なものがあった。無償の、だがそれだけに書かねばという思いから生まれた作を、「赤松を主として唐松、白樺、はんのきをまじえた」森の中、「四方数町の間に隣家も見なければ隣人も持たない」ささやかな分水荘の座敷で詩人はたった一人の聴き

手の私にむかって読んでくれたのである。またとない道具立ての中での、このさし向かいのぜいたく。それは若い私を酔わせるに充分すぎるものだった。

それだけに私もまた喜八以上に本の発刊を待ち望んでいた。そして、あくる昭和二十三年の三月、本は出来上った。

当時はろくな紙もなかった時代だから今みると実に粗末な…というより粗悪なザラ紙に印刷されていた。おまけに略装の表紙のやや厚い紙は何かの文房具の再生らしく貼り合わせた紙をすかして物差しのためのセンチの目盛りがみえている。しかしそれでも新刊書など仲々生まれにくい状況だったから詩人はむろんのこと、待ちに待っていた私もわが事のように嬉しかったのを覚えている。見返しに喜八は墨で献辞を記して下さったが、それは「額縁はともかく、絵を見てくれたまへ」というものだった。というのもそれを手がけた藤森夫人の表紙がどうにも稚拙な感じで、レイアウトや文字のスタイルなど印刷技術の悪さをさしひいても喜八再生の第一歩ともいえる書にはふさわしからぬものだったからである。

私は私でこれも若さからの図々しさだろうがその本の書評めいた文章を地方新聞に書いた。何をどう書いたのか、いましまいわすれたその切りぬきがみつからないのは幸いというもの、おそらく若僧のくせにしたり顔の文章を書いたにちがいない。

ともあれ、こうして昭和二十二年の一年をかけて喜八自身のよく使った言葉でいうなら、孜々(しし)として書かれた新らしい土地での実りがひとつの形となったのである。

「樹々のあいだ、山の中、さてはきれぎれの雲が遊ぶ高原の広がりに、一年の最も美々しい時間が鳴りひびく時、私は人間と自然との無限の恩寵に生きている。どんなに価なく見える物も私を富ませ、どんなに単純な外観からも深遠な意味を私は汲み取る。私は心情と全感覚とを傾けて供せられるすべてを味わい、すべての物におのれを与えて無数の生を生きるのだ。こうして心身の虚脱の底から緩やかな曲線をえがいて昇るあの甘味な、柔かな、しかしもう後戻りする事の決してない、確実な恢復期を今私はたどっている」

「恢復期」の最後の文章そのままに詩人はみごとに恢復したのだが、若い私をとらえて魅了したのはたぶんその恢復へのエネルギーだったのだと今にして思う。そのことに関して詩人は特に口にはしなかったし、私はさほど深い所で詩人の機微を見通していたわけでもなかったが、しらずしらずのうちに詩人のエネルギーは若い私を燃やし改めて鋳直していたのだろう。

喜八が訪れる者に対していつも心こまやかにもてなす人だったということをもう何度も私は折りにふれて書いたり話したりしてきた。もともとそういう人だったのだが、この時期の喜八の心境はその前後の時代のそれとはだいぶちがうものではなかったろうか。意思の強いこの詩人はむろん孤絶の状態でも一無名者として立ち直ったにちがいないが、一方下町的な人なつこさ、気を通じた人とは膝つき合わせて語りたいといった面も併せもっていたから何かにつけて人恋しい気分もあったように私は思う。

昭和二十一年の秋から二十三年にかけて足繁く通った私に対する喜八夫妻のもてなしは実に心がこもったもので通り一遍の客への礼儀とはまるで異るものだった。物資のないつらい生活のなかでよくぞと思うほどそれは心づかいの行き届いたもてなしで、私はあとになって当時を思うたびぬけぬけと饗応にあずかった若者の図々しさを恥じながらも、なつかしさで胸が一杯になるのである。

飲食もさることながら、この詩人の場合もっと別の心のもてなしがあった。それはときとしてオルガンを奏でながらの詩人自身歌う歌曲（デュパルクやヴォルフやシューベルト等々の）だったり、ブロックフレーテの響きだったり、またあるときは先に記したような出来上ってまもない散文や詩の朗読だったりした。私の場合、たまたまその頃私がリルケにどっぷりつかっていたこともあって、喜八はすでに訳されていた飜訳をわざわざ訪れる私を喜ばそうと改めて美しい字で清書し用意しておいたりした。中には和紙の原稿用紙に墨で書かれたものもある。「橄欖の園」や「月夜」、「青いあぢさゐ」「桃色のあぢさゐ」とリルケのもののほかメーリケの「ランプ」などもあって、そのきっかりと生真面目な美しい筆蹟はいまも鮮やかである。この「あぢさ

ゐ」の二篇をいただいたときのことはすでに詩文集第六巻の栞に「傷と白樺の葉」という小文に書いたのだが、一番印象に残っていることだからくりかえしを恐れず簡単に書いておこう。

それが何月だったかそこら辺の記憶が少々あやしいが三輪誠さんと二人で伺った時のことだから二十二年の秋頃のように思う。詩人は私たち二人の前に一寸いたずらっぽい眼をして押葉にした葉を二枚さしだしくじびきをするようにいった。私がとった葉の裏には墨で「アヂサヰ」と書かれてあった。それで私はあぢさゐの二篇をいただいたのだが、誠さんは何を手にしたのか忘れてしまった。優雅なくじびきで手にしたそのおみやげの訳詩の原稿にはさまれた葉は今もなお形をそこなうことなく、分水荘をかこんでいた林の秋をあの日のままに語りかけるのだ。

秋が野山を照らしている。
暑かった日光が今は親しい。
十月の草の小みちを行きながら、
ふたたびの幸が私にある。

谷の下手で遠い鷹の声がする。
近くの林で赤げらも鳴いている。
空気の乾燥に山畑の豆がたえずはじけて、
そのつぶてを受けた透明な
黄いろい豆の葉がはらはらと散る。

この冬ひとりで焚火をした窪地は
今は白い梅鉢草の群落だ。
そこの切株に大きな瑠璃色の天牛がいて、
からだよりも長い鬚を動かしながら、
一点の雲もないまっさおな空間を掃いている。
（「人のいない牧歌」）

喜八にはすぐれた秋の詩が多く、それぞれ私を魅了したり感嘆させたりするが、この「人のいない牧歌」はあの頃の途方もなく静かな高原の秋の広がりと静寂を私によびさます。詩人がこの詩では心のうちの決意や願望をことさらのべていないだけにぽつんと立っている詩人の姿とそれをとりまく広大な秋がワイドスコープの画面のようにうかんでくるのだ。

そして改めて私は思うのだ。詩人とめぐりあったあの秋はほとんどその後の私を決定づける大きな意味をもった恵みの季節だったのだ、と。

分水荘の座敷でのもてなしの中に試練をともなったもてなしもあった。歌仙である。

その頃分水荘の尾崎家では歌仙を巻くという優雅な遊びが流行（？）していた。喜八は行人という俳号をもち、一時は集中して句作をしていたときもあるほどの人だから当然といえば当然だが、よもやこれにまったくの素人の私が楽しくまきこまれることになろうとは考えもしなかった。喜八はその頃、小諸に疎開していた敬愛する秋櫻子さんと手紙による往復をさかんにしていたし、富士見の若い人たちと句会をやってその指導をしていたから、詩も最高の作を生んでいた一方、俳句にも割に力をいれていた時期だったように思う。（その後、東京に戻りまた鎌倉へと移るころには作句は文字通りの余技で、この富士見時代のようには作らなくなった）

今私の手もとに残っている「芹摘の巻」をみると、発句が高橋達郎さんで行人（喜八）が受けたあと博次、海彦と続けている。博次とあるのは吉村博次で（彼は兵役から帰還してしばらくしてから諏訪の友人、中島邦一、三輪誠を通じて私との交友が始まった。そのときも山梨から上諏訪の私の所へきていたのだろう。喜八のもとへ同伴したのはこのときが初めてではなく二度目くらいではなかったかと記憶している）、この芹摘の巻はこんなぐあいに展開している。

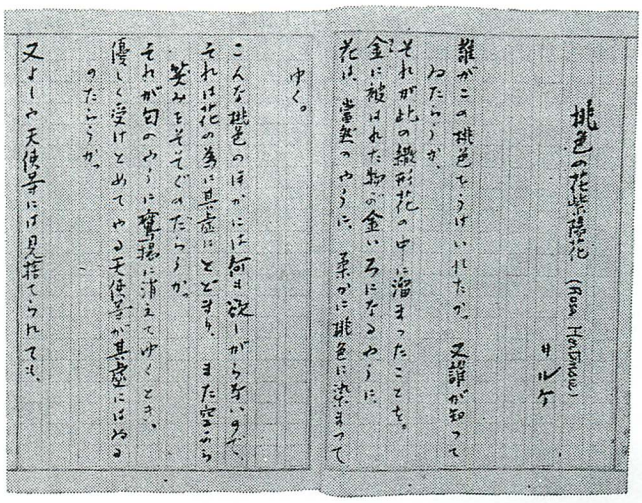
芹摘めば芹もつめたし一の澤　立路
　雪消え霞むふるさとの山　行人
春の人越えて行くなり一人にて　博次
　尾燈にじませ遠ざかる汽車　海彦
外濠の水にはなやぐ夏の月　路人
　ライタアぱちと待つは蜜豆　次
紫の煙もつるゝ帯厚く　彦
　露路の別に曇るジャズの音　路
幾許の思ひ出もあり神戸港　人
　岬離れて船は縦揺れ　次
広東に残せし夢のほろにがく

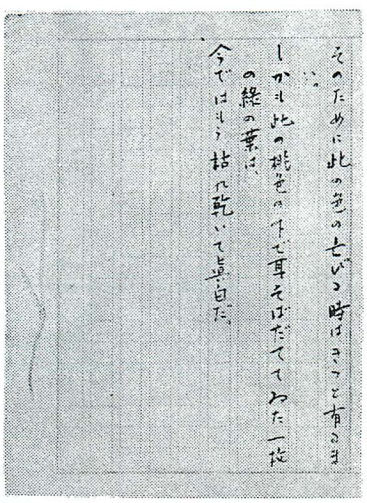
このあと立路（達郎）がつけ、それからは叡子（栄子）行人立路の三人のやりとりになっている。この時の情景はいまでもはっきり覚えているが、下手な考え休むに似たり……とか、おい、まだかい……などとせかされながら、うんうんとひねり出すのに苦しんでいるうち上諏訪に帰る下り列車ぎりぎりの時間となったのだった。

この芹摘の巻には年月日が記してないのではっきり判らないが、二十三年に入ってからのような気がする。私が初めてこうしたものを書かされたのはその前年昭和二十二年の九月である。どういうきっかけでそうなったのかは忘れたが喜八はさきに引用した「恢復期」に描かれている裏の座敷で皆目判らない私におおよその約束ごとを教え、いきなり二つ折を作ることになった。信州にきてひやかしのつもりで地元の歌会に行き、白秋ばりの感覚的な歌は少し書いたものの、あとにも先にも俳句はやったことがない。小学生の頃、季語など入らぬ五七五の文字を並べた記憶がわずかにあるだけといった私にこれは大変な試練が襲ってきたというほかない。裏座敷は実に涼しく、縁の向うの木々を眺めているぶんにはこんなに気の安らぐ場所もなかったろう。恢復期の詩人が眼を病みながら心と体をやしなっていたその場所が何と私にとって苦行の場となったのである。発句はたまたま心にあった詩の断片のようなもので何とかごまかしたものの、詩人とさしむかいのやりとりだからそのあとは相手のイメージを受けとりながらの変奏、しかも詩人の方は手馴れているからすいすいとつけられてこちらの休んでいるひまがない。それでもこの二つ折は日を置かずして仕上ったように覚えている。それにしても昼のまだ陽ざしの明るい時から暮れおちるまでの緊張はつらいけれども実にたのしいものだった。

吹かれ来てここにさびしき白楊樹海彦
押麦を干す庭の秋の陽　行人
松かさをひろふ子供の声絶えて　彦
汽車の煙の残る別荘　人
桂冠の身はひろ〳〵と月の影　彦
雁来紅にひそむ白猫　人
物干に揃浴衣も小舟町　〃
姉と妹のひゞく塗下駄　彦
とっくりと身の振方を相談に　人
このごろ目だつ叔父の白髪　彦
物に読む近衛の花は糸桜　人
小枝に煙る春や琴の音　彦

森閑とした高原の田舎家の裏座敷、詩人と向いあっての言葉のイメージ遊び……こんなぜいたくな時間を持てた若い私は何と幸せだったことだろう。それにしても喜八の「小舟町」あたりからすっかり東京下町の風情となったところなど、喜八はむろんのこと、私にも心の底に東京への思いが仄かにちらついていたようで、よみかえすたびに一寸切ない感じになる。





尾崎喜八から筆者に送られたリルケの詩「桃色のあちさゐ」の墨書（伊藤海彦氏蔵）。

尾崎喜八・訳詩抄

――未刊行、草稿詩篇拾遺――

ヴィクトル・ユーゴー

寒い

冬が堅い路を白くした。
お前の日々は悪しき者等に悩まされてゐる。
北風がお前のやはらかな手を傷つける、
憎しみがお前の悦びの上で息をする。

雪がくらい畦をうづめつくす。
光明がしだいにすくなくなる……――
お前の戸口を北風にむかつて閉ざせ！
お前の玻璃戸を黒雲にむかつて閉ざせ！

さて其れから、お前の心を明け放て！
心、それは神聖な窓である。
太陽は霧につゝまれてゐる、
しかし神は、恐らく、光を放ちたまふ！
幸福を疑へ、死すべき果実を、
嫉妬にみちた人を疑へ、
司祭と祭壇とを疑へ、
さあれ愛を信ぜよ、おゝ我が生命よ！

愛を信ぜよ、常に全きもの
常にもろもろの帳（とばり）の下に輝くものを！
愛を、竈の火種（ひだね）を！
愛を、星の光を！

愛せよ、そして希望を失ふな。
時折は私がよぎり、また私の詩句が
ひそやかに囁くお前の魂のうち、
なべての物をその位置におけ。

倦むことを知らぬまごゝろ、
けだかい徳の静けさ、
そして他人への寛容こそ、
色あせた過ちを拭ひ去る。

すべてが美しいお前の思想の中で、
何物をも衰へさすな、退かすな。
お前の愛をたいまつとせよ。
人は燃えるものによつて輝かされる。

彼等恨の悪魔には
お前のほがらかな優しさを向けよ、
また憎しみの言葉を発した者には
そゝぐに憐れみをもつてせよ。

憎悪、それは心の冬である。
彼等を不憫に思へ、されどお前の勇気をまもれ。
お前のほゝゑみ、勝利者をまもれ、
麗はしい虹、嵐よりうまれよ！

お前の不滅の愛をまもれ。
冬は、天体を、その火を消すか。
神は一物をも天空から奪はず、
また一物をもお前の魂から奪ひたまはぬ！

（「瞑想」第一巻より／「白樺」大11・11）

エミール・ヴェルハーラン

荷車の挽子

ゆったりした、調和のとれた身振りをして
君のコップを飲みほせ、
荷車の挽子。

それはリースの水と
フランドルの大麦と
忽布（ホップ）とを含んでゐる。
君のコップを飲みほせ
快活に、一心に、
さうして君自身の中へ
少しばかり君の国土を流しこんで置け。

大麦と忽布とは
光明にむかつて熱狂する前に、
まづ深奥な土壌から
大地の結構な汁液をとつたのだ。

君と同じやうに、荷車の挽子よ、
彼等の知つてゐる世界は
アロストからテルモンドへ続く
あの明るい親密な田園ばかりだ。
彼等は陽気な時節に
同じ雨と同じ太陽とを愛した、
さうして今や川の水に混ざつて、
君の赤い逞ましい大きなからだの為に、
おもむろに
麦酒になつたのだ。

ゆったりした、調和のとれた身振りをして
君のコップを飲みほせ、
荷車の挽子。

さうして二杯目を飲むために
上機嫌で
註文するがいゝ、
玄関の入口で
錫の盆へのせて
それを君のところへ運んで来る
あの健康な、血色のいいおかみさんに。

なぜかと云へばあの女も亦、
その剛健な力と、まつかな美しい血とを、
大地から、空気から、風から、太陽から取つたのだ。
畑とその収穫、川とそのうねりとは
あの深い眼を熱狂させた、
さうして大麦や忽布と同じやうに、
あの女はフランドルの美しい強い植物なのだ。

ゆったりした、調和のとれた身振りをして
君のコップを飲みほし、君の国土を考へろ、
荷車の挽子。

（「向日葵」大13・11、12〈合併号〉）

美しい雲

おんみは真珠母と琥珀の空で、
野を、牧場を、村々をきはだゝせる。
あゝ、美しい雲の月、
九月よ！

馬の臀や鋤の歯や、それらを随へて、
ゆつくりと畑の中をゆく若者らの姿が、
いやました光明の高い荘麗の下で、
重々しい運動のもつとも明るい諧調を織りあげてゐる。

空気が震動する。白い家々の上を飛びすぎる
無数の鳥のつばさの音がきこえる、
むかうのはう、森のかたはらでは苔桃採りの
女達が、
赤いとりいれ物の上へ彼等の歌を注いでゐる。

天地のあひだに平和が成つた。
平等な、不断の、ひとつの幸福が確立された。
夏はなほ静かなかくれがを去りがてに、
子供らはまだはだしで走つてゐる。

そして九月よ、九月はあんな高みを
その真珠母と金の天空とで旅をし、
牧場や、野や、村々のうへに、
もつとも美しい雲のきらめく塊りを浮かべてゐる。

（「文華」昭21・9）

マルセル・マルチネ

光明の最初の日

光明の最初の日、
罪悪が始まつて以来二度目の春の告知、
(そして私の歌も
私のせつない悩みをこえて
雨後の陰欝な荒野の上の
一羽雲雀のやうに、
今いちど私の歌も舞ひ上がる)

光明の最初の日、春の告知、
夕がたの青い天空、巴里(ブォーブゥル)廓外の壁の上に光る
あかるみ、
——おゝ数へ知れぬ年々の春よ——
辻公園の中、母親らが縫物をしてゐるベンチ
のまはりで、
子供の群が遊んだり囀つたりしてゐる、
また若い女達が浮々と早足でゆく街路では
そのぴかぴかした肉体が
軽い優しさにほゝゑんでゐる。

光明の最初の日……
——春よ、お前は又も地上に起き上がるのか。
私達の友、彼等は何処にゐるのだ。私達の希
望、私達の夢想は。
冷淡な春よ、
お前は小鳥と薔薇とをつれて帰つて来るのか。

春の告知、光明の最初の日、
歌へ、歌へ、春よ、破れた心の奥底から、
雲雀のぴろぴろは
大砲よりも強いのだ、
歌へ、歌へ、私の心よ、お前の破れた夢想の
上で、
お前の希望を歌ふのだ。

詩集 Les Temps Maudits より
(「太平洋詩人」大15・12)

春のイマアジュ

(片山敏彦、尾崎喜八、上田秋夫に)

奔湍の水、無色の水よ、
しかもその上を君の流が流れ又滑る巌の
何たる夥しい生命をもつて此処に震動する事
だらう!

桃

たがひに擦れ合ひながら、槲(ママ)の葉むらよ、
君達たち(ママ)の乾いた落葉は、ものの終焉…

しかし再生の空間に
やはらかになすられた
ももいろのパステルの斑は、
桃の花。

光

山々の影絵、
地平線上の踊、
それを清々(すがすが)しくしたり照らしたりする春の空
と同じやうに晴れやかな軽やかな。

槲(ママ)よ、微風のさざめく
君の乾いた葉を、
君は未だ大事にしてゐる、

だがまばゆい緑玉の
君の若葉は、
もう君を光らせてゐる。

花、夕暮

まつしろな巴旦杏、すつかりももいろの桃
の花、
緑と赤の落日に花やいだ空間に浮かぶ花達よ。

宇宙

傾いたり楽しく曲つたりしてゐる橄欖の枝は、
空気の愛撫に感動したこまかいレエス、
しかしその小枝の間からは、ぱうと煙つた光、
小さい谷、丘陵、そして空、そして海。

草の影

太陽に焼かれた岩の
眼もくらむ白さの上で
一本の烏麦の影が
太陽に酔つた昆虫の
黒い脚のやうに動いてゐる、動いてゐる。

空

ひとひらの雲もない空、
たゞ薔薇のにほひ、

そして静寂の中にものを満たす
お前の歌、五月の鶯よ。

（未発表「行人の歌」より／「東方」昭3・6）

自由

白い鷗よ、
青い水の上を
君達は白い波濤と反対に飛ぶ、
君達の涙のまじる水の無限の歎きの上を、
その水とすれすれに、
幾里も、幾里も、
おゝ自由な者等よ！
むなしい広がりの
流動する行程に結びつけられた自由な君達、
しかもその空の道筋をたゞ己が為にのみ開いてゆく、
又路を失つた悲しみの中ですら開拓してゆく、
おゝ自由な、自由な、海の叛逆の娘等よ！

星

星よ、海の大きな夜の中で覚束ない火よ、
ほの温かい五月の夜を折り返す波にかぶさる
眼に見えぬ波はもう一つの呟きですらない、
星よ、人間のさまよふ心への忠実な呼びかけよ、
宇宙の潮の満干に乗つて流れる世界が
黒い深淵の中に唯一つの金の点を彫りつける、
物の美と端正よ、
私の心がお前の事を想ひ出す時は近づく。

（以上二篇近作「地中海から」／「若草」昭3・8）

マルセル・マルチネ

尾崎喜八記

一八八七年、仏蘭西の東部コオト・ドオル県のディジョンで生れた。今年四十二歳。ロマン・ロランの隣県人で生粋のブウルゴオニュ人だ。一九〇五年から若い仲間の雑誌に詩の発表を初めた。最初の詩集「人間と生活」は此等の詩を集めたものである。一九一四年の秋に新らしい詩集「人々の真中に於ける人間」を出さうとしたが、欧洲大戦に妨げられて出さずにしまつた。その欧洲大戦を通じて、敢然と戦争の罪悪に対抗しつゞけた極めて少数の芸術家の一人で彼はあるのだ。戯曲「夜」詩集「呪はれた時代」、小説「襤褸の家」が其の時代の作品である。別に彼の編纂にかゝるロマン・ロラン選集がある。又小冊子「露西亜の為に」がある。

此の五年以来彼は糖尿病で苦しんでゐる。今日では極めて重態である。「運命はその苛酷な役目を果すとしても、私の精神は自由で清朗である」と彼は訳者への近信に書いた。

彼の人間的信条に就ては色々な説が行はれてゐる。併し此事はさう簡単には述べられない。併し彼の近作を読んで、コムニスト日本は、マルチネを第二のトラアと云はうとするか！

（「若草」昭3・8）

マルク・ド・ラレギー

死者の傍らに立つて！

それなら彼等を平和に眠らせておけ、
死のかくれがへ追ひ立てられるために、
この死んだ者達！　彼等は君等に何をしたのだ。
あんな悪と大罪との
重荷を背負つた後で、
君等の私の憎みの為に地獄の責苦をうけた後で、
その青春と血とをさゝげた後で、
慈悲にみたされた往生のため、
かまはず捨てゝ置いてくれと、
道行く者に彼等は求める権利を持たないのか。
それなら彼等を平和に眠らせておけ、
氷つた地面や厚い芝生の下、
最後の姿勢の美しい涅槃の中で！
彼のうちで身を養ふ
又その為に徐ろに彼等のからだが解体する
あの虫をもう決して感じないために！
もう此上二度と彼等が眼をあけないために、
又彼等の死体が其処にやすらふ
永遠と慈悲との無のなかで、
おぞましい此世を忘れ果てるために！

（一九一六年十一月ヴェルダンで戦死する少し前の作）

ジャン・ド・サンプリ

彼は僕に云つた……

彼は僕に云つた、あの兵士は。
「捨てゝ置いてくれ！　捨てゝ置いてくれ！
俺は一人で泣きたいのだ、――忘れたいのだ、
泣きたいのだ、
もう憐愍も信じなければ、もう希望も信じない。
俺は死にたいのだ」と。

それで僕は彼のところから去つた。

ばか！
彼が僕に「去れ！」と云つた時
実は彼が感じさせたがつてゐた事柄を僕は理解しなかつたのだ。
彼はかう思つてゐたのだ、「居てくれ、君、若しもさう為たいなら、若しも出来るなら！
ほかの者はみんな往つてしまつた！……」
それで、道をひきかへしてゆくと、
僕は彼が僕を凝視してゐるのを見た。
しかし僕が彼を理解し、彼に腕を差しだすと、
悲しげに、
彼は首をふつた、「もう遅い！」と云ふかのやうに。

そして僕は彼を去らなければならなかつた、
今度こそ、永久に……

（「太平洋詩人」昭2・2）

ピエール・ジャン・ジューヴ

モーツアルト

私がおんみの夏の虹を聴いた時、
幸福は空のなかほどに生れ
悲しみの剣は
雲や小鳥の千の流につゝまれ、
野に咲く一本のおだまきは日光に愛されるため
鎌に忘られてゐた。
ときはなたれた郷愁、そんなにも苦がい優しさ。
君は知るか、夏の六時のザルツブウルを、
愉悦の身ぶるひ、太陽は沈んで雲にのまれた。

身をふるはせ――夏の日のザルツブウルで
おゝ神々しい快活よ。おんみは俘となつて死にゆいた、おゝたくみ出された青春よ、
しかし唯一の日があつて尚もこの真実の丘々をめぐる。
雨が降つた、嵐のなごり。おゝ神々しい快活よ。
世界の音楽会のあらゆる広間で瞑目するあの人々を慰めよ。

（Les Mysterieuses Noces から／「太平洋詩人」昭2・3）

ジュール・ロマン

ガイド

この朗かな男の
眼は
澄んだ泉、
肩は
古い太陽に焦げて
完全な歯を見せる、
純粋な顔の中の
二十歳の微笑、
骨骼の上で天空に鍛へられたその皮膚！
あゝ君は見たか、
俊敏で憂鬱で侮蔑的で率直な
この男の魂を。
知己を求める心、彼はそれを突戻す、
ほゝえみながらの一語が
彼の返事で、
ひとつのまばたきが
その注意。
信頼は網のやうに彼をめぐつて、
そのからだは到る処に立つ松そのものだ。
天の男よ、君の秘密を語れ！　君の注意を聴かせろ！
だが彼はほゝえみ、その歯は二十歳で、私には彼の言葉が全くわからない。

（詩篇「精神」より／「山小屋」昭9・5、6合併号）

詩集「ウーロップ」から

日日の一団が平和の欧露巴を歌ふ

私は敵国の谷間に花盛りの林檎を見た
又船の上の方で、渇いた春の舌のやうに
六月の風に突き出てゐる三角旗も私は見た

諸国民を満載したラインが海へとどくのを
夜もすがら眺めてゐる群集の中に私はゐた
その水は国境を漂流物のやうに運び去つてゐた
コローニュの船橋が、ロッテルダムの方へ出てゆく
一艘の騒がしい汽船の為に開くのを私は見た

私はもう橋の上にゐた、私の足は橋板の上にあつた
ぴちやぴちやいふ水中で板の鳴るのがよく聴こゑた
そして同じ瞬間にもう一つの素晴らしい身振りを私は見たのだ
二つになつたタワア　ブリッヂ、その両半身が空に祈つてゐるのを

（「銅鑼」昭2・9）

コモの湖水の四羽の家鴨

むかしむかし、或日のこと、
コモの湖水の水ぎはに
四羽の家鴨がすわつてゐた。
砂嚢から臀のところまで、
脚の無いその腹をぴつたりと砂につけてゐた。
折柄太陽にぬくめられた
みじかい、薄い波がときどき
その腹の下へ柔かにもぐりこんだ。

そして又ぢきにやつて来る波が
同じ運動で彼等を舐めると
ひどく満足らしく悠然と
四羽の家鴨はめくばせをした。

そして私、崖の上で、
頭から太陽を浴びて立ちながら
この食鳥（にく）の楽しむさまを見てゐた私は、
宿屋へ飲みに走つたのだつた、
赤い葡萄酒の一盞を。

アノオル

お聴き、私達のまはりで
フランスの最後の停車場が顫へるのを！
お聴き！　息を満たした喇叭のやうに
アノオルは顫へたり微吟したりしてゐる。

一つの歌のやうに私達はアノオルを出る、
それが古いアルダンヌにこだまする。
その喇叭のあかがねに合せて
拍子をとつて私達は歌つてゐたのだ。

（以上二篇「Le Voyage des Amants」から／「濶葉樹」昭4・5）

ジョルジュ・デュアメル

フロランタン・プリュニエの譚詩（バラッド）

彼は二十日といふ長い間を持ちこたへた、
さうしてお母さんはそばに附添つてゐた。

彼は持ちこたへた、フロランタン、プリュニエは、
なぜならお母さんが彼の死ぬのを望まなかつたから。

彼が負傷したと知るや直ぐに、
彼女はやつて来た、古い田舎の奥から。

彼女は砲声のとどろく国をぬけて来た、
そこでは莫大な軍隊が泥の中でうようよしてゐた。

ぎごちない頭巾の下で彼女の表情は堅い。
なんにも、何人をも彼女は怖れない

彼女は十二の林檎と一緒に一つの籃と、
新らしいバタを入れた一つの小さい壺とを持つて来た。

◇

日がな一日彼女は座つたままでゐる。
フロランタンが負傷してゐる寝台のそばに。

彼女は人が火を点ける時刻にやつて来て
フロランタンがうはごとを言ふ時まで居のこる。

彼女は一寸の間出てゆく、人が「出て下さい！」と云ふ時、
哀れな胸に手当が施される時。

居のこる必要があれば居のこるだらう。
彼女は息子の傷を見ることの出来る女である。

うめき声を聴いてはいけないのか、
待つてゐる間、その靴を水びたしにして。

番犬のやうに彼女は寝台のそばにゐる、
人は彼女がもう飲み食ひをしない事に気がつく。

フロランタンももう何も食べなくなつた。
バタは小さい壺の中で黄いろくなつた。

◇

木の根のやうに節くれ荒れた彼女の手が
痩せ細つた息子の手をしつかと握る。

辛抱づよく彼女は見つめる、
とめどなく汗の流れる白い顔を。

紐でしめつけられた頸を彼女は見る、
空気が通りながら其処で湿めつた音をさせる。

かういふものを彼女はすべて見る、
燧石の割目のやうなその熱烈な、乾からびた、
きびしい眼で。

彼女は見て、しかも決して歎かない。
これが彼女の母たる仕方である。

彼は云ふ、「僕の力を取つちまふのは此傷だよ」
彼女は答へる。「お前は私が此処にゐる事を知つてるね！」

彼は云ふ、「僕は死んじまふやうな気がする」
しかし彼女は云ふ、「いゝえ！　私は死なせないよ、お前！」

◇

彼は二十日といふ長い間を持ちこたへた。
さうしてお母さんはそばに附添つてゐた。

弱つた子供を水の上で支へながら
海を漂ふ年老いた泳ぎ手のやうに。

ところが、どう過ごしたか分らない二十の夜のために
ひどく疲れを感じた或朝、

いくらか頭をぼんやりさせて、
彼女はほんの一瞬間まどろんだ。

するとフロランタン　プリユニエは忽ち死んだ。
彼女を起こさないやうに、音も立てずに。

（「四つの譚詩から」／「バリケード」昭2・10）

昔、私はくゆらす事を好んだ

昔、私はくゆらす事を好んだ、
あの土製のこはれやすいパイプを、
強い、軽いその香気が
沢山の沢山の夢想を高まらせた。

今日、それは私のために終る、
あのほつそりした陶土の管は。
余り多くの小さい剛勇の手が
私の閑暇につきまとふから。

昔、私は歩くことを好んだ、
敏捷な、大胯の歩きかたで。
この満たされない心には
少くとも世界が必要だつから。

今日、私はお前達を知る、
親しい暴君的な道連れよ、
お前達の小さな脚が
私の飛躍を制禦する！

一つの別の夢想を愛するために
私は多くの夢想を断念した、
又唯一の生活に対して千百の生活を
惜しげもなしに私は与へた。

（「詩集」昭2・11）

デユアメルの一訳者として

尾崎喜八記

ジョルジュ・デュアメルは一八八四年(明治十七年)六月三十日に巴里で生れた。八人の同胞の中の七番目。姉の一人がシャルル・ヴィルドラックに嫁した。即ちローズ・ヴイルドラック。

一九〇六年から八年にかけて、ヴイルドラックの夢想を実現した芸術家の兄弟的な植民地「アベー」の生活が、マルヌ河畔のクレテーで営まれた。ヴイルドラックと、アルコスと、デュアメルと、アンリ・マルタン・バルザンと、アルベール・グレーズとが、その古い大きな空家の借家人になつた。アレキサンドル・メルスロオが後で加はつた。屢々来る友人に画家ベルトル・マーン、詩人ジュール・ロマン、音楽家アルベール・ドワイヤン、詩人ジョルジュ・シエーヌヴイエール、レオン・バザルジエット等があつた。若い兄弟達は約二年の間、このアベーで著作し、印刷し、栽培した。彼等の最初の書物が此処から出版された。デュアメルの第一詩集「伝説・戦闘」もその一つである。彼は又此処でブランシュ・アルバーヌ嬢と相識つて、間もなく結婚した。

(「バリケード」より/「詩集」昭2・11)

シャルル・ヴィルドラック

今度の時には

お前は今ではもう変ることは出来まい。もう遅すぎる。しかしお前が一箇別の人間的存在として再び此世に来る今度の時には、それこそ発奮するがいい。敏活で抜目のない人間になるがいい。

歩くことが出来るやうになつたら、道の真中を進むがいい。

歯が生へたら、現在に飛びかかつて頭からかぶりつくがいい！

お前の行く処で叫ぶがいい、「己は此処にゐる！」と。札(ママ)を打つて直ぐさまその成行を見るがいい。

お前が余り遣りすぎたやうに、離れてゐて夢想する遣り方を今度は始めないがいい

祝宴や争やお前自身から

離れて、

まるで自分の前に永遠を持つてでも居るかのやうに、

幾多の廻り道と整然たる歩調とによらなくては何物にも近附かなかつたあの遣り方は。

——しかし僕は自分の前に永遠を持つてゐるのではないでせうか。

(「詩集」昭4・1)

エルンスト・トラー

森

夕暮の風につゝまれて

遠い地平で揺れてゐるおんみ森よ、

なんと静かに私の渇望がおんみを満たす事か。

虜はれの苦悶を抑へ忍ぶ此の瞬間！

私は鉄柱に向つて我が額を打ちやぶる、

そして私の手はその焦燥を振払はうとして傷つく。

私は一匹のみじめな犬よりも遥かにみじめである、

私は死ぬ程打たれたけだものの絶望の叫である。

山毛欅(ぶな)の森よ、圧迫された者等の大寺院よ、

松よ、ふるさとの音楽、苦悩の慰安者よ。

あゝ！ 幸福な子供のまはりで、なんと霊妙にも、

遠い風景の衣裳をおんみは織つた事だらう。

抑も何時の日おんみの深い囁きにいだかれておんみの高らかな讃歌を私は聴く事が出来るだらう。

牢獄の中庭を通る懐姙の娘

正午の光り輝く中をお前は見事に歩いて行く。

お前の胸のまはりでは成熟の風が鳴り、

お前の頸筋を一条の光の小川がながれ、

おゝ！ お前の口の上には馥郁たる風信子(ヒヤシンス)が咲いてゐる。

お前は愛に熱狂した夜の恩寵に満たされた

得もいへぬ懐姙の萼(うてな)である。

お前の額は雲雀の歌で冠りされ
お前の荷物は較べるものもなく甘美である。
分娩の苦悶がわななく転々の中で呻きを上げる
その約束の日にお前に手を差しのべるのは誰か
私は荒々しい一言に脅されるお前の眼を見る。
その虜はれの灰色の年月の中で衰へてゆくお前の腰を私は見る。
よるべもない赤児を溢れるやうなお前の乳房から引き離す
没義道な女監手を既に見るのだ。

（「牢獄の詩」から／「詩集」昭3・5）

ヘルマン・ヘッセ

少女が家にゐて歌ふ……

（一九一四年十二月）

お前白い雲よ、お前涼しい雪よ、
私の大切な人の鳶色の髪の毛の中へ、
私の大切な人の愛すべき手の上へ、
遠い土地でお前は降つてゐるのか。
お前白い雪よ、お前涼しい雪よ、
それではあの人も寒くはないのか。
云つておくれ、あの人は白い野原に横はつてゐるのか、
それとも暗い森に横はつてゐるのか。
お前白い雪よ、お前いつはりの雲よ、
私の大切な人を休ませて置いておくれ！
お前は何のためにあの人の髪の毛を蔽ふのか、
又何のためにあの人の眼を蔽ふのか。
お前いつはりの雪よ、お前白い雪よ、
あの人は決して死んではゐない。
多分捕へられて
水とパンとのそばに座つてゐるのだ。
多分間もなく帰つて来て
戸の外へ立つ事がきつと出来るのだ。
だから私は涙を拭かなくてはならない、
さもないとあの人を見ることが出来ないから。

（「学校」昭4・2）

イヴォンヌ・エルマン・ジルソン

ワロンの村々

（妹に）

ボワ・デエヌ、トリユウ・ラ・ヴアレエ、
トリヴイエエル、トウー・ヴアン、マリイモン、
ワロンの美しい村々と部落との名よ、
私は念珠のやうにお前達をつまぐる、
その一粒一粒はすがすがしい葡萄の実、
その味ひは慣れた私の口に甘い。
サアル・グアム・アヴリイヌと云ふ時、
私は眼に浮べる、年老いた牧師の家を、
垣根をめぐらしたその葡萄園を、
又受胎告知の絵の奥に描かれたやうな庭の上に
そのほつそりした翼を伸ばしてゐる
あの鐘楼のかげを。
オオルヌの修道院――さうすると私は思ひ出すのだ。
千百の小鳥が巣くつてゐるあの廃墟を
アアチの割目の一つ一つに
緑の草の生へてゐる彼処のことを。
私は聴く、あのはつらつとした水の若さの響を。
それはあなたの精神に悦びの明るい鈴の音を置くのだ、
唇にあてた一輪の花のやうな一つの歌を！
ジャミユウ。太陽を浴びてそよぎたつ麦の荘麗。
ラ・エストル――おゝドレエヴ！　おゝ古い果樹園よ！
これは広場だ、主の小路だ……
おゝワロニイ！　おゝ忘られる事のない庭庭よ。
二人の喪中の小さい姉妹の全幼年期が
平和に憩つてゐるのは此処なのだ、
私達の青春の心臓が高鳴りしたのも此処なのだ。

お前の方へ降りて行くために私は森を廻つて
行こう、
生れの村よ！　私は一切を見るだらう、
家々を、薔薇の木を、路の小石を、
声の抑揚を、顔の表情を、
木の葉だの土の匂を。
けれども若しや誰かに手を取られたら
私はどうして涙をこらへる事が出来るだら
うか。

踊りまはる風は

踊りまはる風は身を休めない……
なゝめになつた太陽が私の部屋にさしこみ、
動かぬ飛揚の姿のまゝ凝つた花びらの
薔薇いろのシクラメンに触はつてゐる。

むかうの開墾地で粘土が光る。
私は遠い工場のサレインを聴く。
路は村から町へ
それぞれの運命の方へ行く人で一ぱいだ。
そして私は世界のあらゆる見知らぬものを愛
する！

けれども私は風の中の我家を愛する、
又私の愛情と私の疲れとを、
そして私の慾望を、いつも飛びさうで
絶えて飛ばないシクラメンの花にする
このためらひを私は愛する

秋

この枯葉を風が置いたところへ置くがよい、
玻璃のコップの中へ。
これは美しいくだもののやうに黄色くて紫だ、
これはすべすべすべして冷めたい、
これは秋の全躰だ。

風は私のテエブルの上までこれを追つた。
それにしても何処から来た葉なのだらう。
むかうの丘の中腹にある青い森からか、
沼のへりの切られた樹からか、
それとも鳩の嘆息のやうな
優しい、衰へた青空の下の
花のなくなつた庭からか。

その枯葉を私の眼の前に置くがよい、
日夜の哀惜と、夢の思ひのてりかへしと、
音もない水のやうに私達のまはりに
高まつて来る過去の日の引力とに
けふは青ざめてゐる私の眼の前へ。

（以上三篇「潤葉樹」昭4・4）

Yvonne Herman = Gilson（イヴォンヌ エルマン ジルソン）

尾崎喜八記

去年の四月、私は白耳義ブラバントの未知の女の詩人から、一冊の詩集を受けとつた。序文をヴイルドラックが書いてゐた。詩集は「心の夏」といふ題を持つてゐた。

『歌ひながら己れを解放する魂と心』とヴイルドラックは書いてゐる、『滴涙の暗い逸楽、優しくて悲痛な微笑、狂喜の、勇の、又矜恃の叫び。

そして本能から出た歌は調和的で正確である。

又其声は美しい。

エルマン・ジルソン夫人の何れの集を読んでも、吾々は其処に何よりも先づ彼女の日常生活と心とを満たしてゐるところのものを発見する。これは一層善い事である。これは、時代と其流行とが如何にもあれ、ポエジイなるものが遊びではなくて深い要求であり、満ちあふれた自発的な流出である事を茲に証拠立てゝゐる。詩人が歌ふのは何よりも此の為である。願くば詩人がみづからを歌ふ事を』

ヴイルドラックの此言葉はよくジルソン夫人の詩の特質を言ひ表してゐる。此人を知らなくても、彼女がどんな人であり、どんな事柄に心を動かし、どんな風に生きてゐるかゞ手に取るやうに分るほど、其詩は自発的で、卒直で、強くリリカルである。そして私としては、やはり其処にヴエルハアランや画家フラン・マズレエル等に見る白耳義芸術家の官能的パッションと陶酔の烈しさとに気がつくのである。ノアイユ夫人、ペラン夫人等に見る典雅なラテン的整斉のかはりに、其処には、時に暴烈なエモオションの荒れがある。フランドルやワロンの子の血管を流れてゐる野性な逸楽がある。田舎のブルジョワの幾らか粗野な、しかし真正直な告白がある。大理石の彫琢のかはりに田舎家の炉辺の真情の発露がある。ルモニエの、ヴエルハアランの、エクウの、そしてジヤン・トウツスウルのやつぱり一族だと云ふ気がする。

紹介のために訳した三篇の詩のうち、「ワロンの村々」は其の烈しい響きと歯切れのいゝリトムとで最もすぐれた詩であるが、日本語では只意味を伝へたに過ぎなかつたのが残念である。仏蘭西語で書

かれてゐて、しかも仏蘭西の詩とは又違ふ善さが、原語では集中いたるところにある。既刊の著書に「悲しき狂喜」、「濡れた黄楊」、「紅花と薔薇とヒース」、「垣根の鶯」の四冊があるさうである。

（「濶葉樹」昭4・4）

アンドレ・スピィル

石

石といふものは皆年をとってゐる。アラビア古諺

君達は何処から来た、君達は何処から来た。
ころがる石に苔はつかない。
君達は何処から来た、君達は何処から来た。
ころがる石に銭は無い。

幾世紀このかた転げて来た石よ、
青に、
緑に、
きずや、やくざや、
紋理や、孔でいつぱいな、
軽石、御影石、
燧石、卵石、雲班石。
水の子供よ、火の娘よ！
滑れ、唸れ、飛び上がれ、浮け、
君達の綺麗な母岩のなかで眠れ。
目を上げて、目をうつむけて、
僕は行く、一歩は一歩、僕は行く。

さうして君達が僕の足を疲れさせたら、
一緒になつて僕等はねむらう。

（「詩文学」昭5・7）

ルネ・アルコス

或友の思ひ出に

僕等はもう君に会ひに行く事は無いだらう、
兄弟よりも親しい友よ、
君が妻君や子供と一緒に生きて、
橄欖を摘んだり、
井戸から水を汲み上げたりしてゐた
あの麗かな田舎へ。
美しい夕暮に最初の星の顕へを見ようと
君がよく井戸の縁に肱をついてゐたあの田舎へ。

日々の仕事に捧げられた
光明の時間の後に、
影の時間がやつて来て、
君達三人の頭がランプの下。
僕は見る、季節のくだもので飾られた卓布を、
君が荘重な手つきで裂くパンを、
又水気に曇つた水差を、
さては君の葡萄から採つた酒で一杯の酒壺を。
其頃は生きる事に未だ幾らかの価値があつたのだ。
君は古い神秘の地上に生れた光栄を
かろんじる人達の一人では無かつた。
生ある人間の一番小さな行為をも、
若々しい喜びに熱狂して、
誇らかに、清らかに、
君は常に実行した。
君の中へ幾らかの調べと熱とを
さがし求めに来たすべての生命は、
其処から君の落着いた確信の
光そのもののやうに反射した。

僕は云ふ事が出来る、何一つ君に知られなかつた物は無く、
君は宇宙のあらゆる叫びを
聴き取らうと努力してゐたと。
僕は云ふ事が出来る、
君は物と物とを引裂く憎悪に反対して、
結合させ、其結合を鞏固にする術を弁へてゐた人間だつたと。
心やさしく、謙譲の美に飾られ、
あらゆる真情の吐露を準備しながら、
君はその愛のうちに
すべての国土と人間とを併せ抱いてゐた……
だがどうしても出発しなければならなかつた、
他の人達と一緒に運ばれなければならなかつた、
それぞれの国家が袋のやうに裏返しにされ、
その縫目の間まで掻きとられて、
人間の雪崩を深淵の底へ転がし込んだ時。
だがどうしても出発しなければならなかつた、

演説で宣言し、
署名に参加した人間共が、
事をさういふ風に決定した時。

君は真昼の大きな太陽の下で倒れた！

君は未だ生きながら横はつてゐた、
その奮激した子等によつて凌辱され傷けられた大地の上に。
夜の空は鬼火の踊であり、
空間はすべて飛ぶ焔、
そしてさまよふ微風は君の髪の毛と戯れた。
君は顔の皮膚の硬ばるのを感じた。
死の近づきと夜の冷涼とが
君の肉を震へさせた、おゝ我友よ！
根元から一撃で切られた樹木が
その葉や枝の中に倒れるやうに、
君は真昼の大きな太陽の下で倒れたのだ、
両腕をひろげ、一声の叫びも上げずに……

そして其以来君の美しい血は流れて止まなかつた。

彼等は名誉を、民族を、
義務を語つた。
おゝ！　少くも彼等はその御祈りと
韮臭いその雄弁とを
吾々には遠慮すべきなのだ。

弱者の神聖な権利のために、
又万人の神聖な権利のために
人々自身が自由にみづからを処理するようにと、
さう彼等は云つてゐるのだ。

しかも彼等が君の生命を奪つた時、
他人の生命を破壊する用に
君の若い生命を供せんが為に奪つた時、
然らば彼等は、善良なる使徒共は、
君が如何に君自身を処する考であるかを
一度でも君に訊いた事があるか。

（詩集『他人の血』／「詩人時代」昭7・5）

カルル・サンドバーク

バルチック海の霧の覚書

七日の間毎日の霧と毎日の霧、タアビンは公海をのろ〳〵進んだ。
己はおもちやであつた、噛みつく猛犬の歯に挟まれた鼠の頸だつた。
霧又霧で、星もなければ太陽もなく、月もなかつた。
それから峡江（フィヨルド）での或る午後、鉛色の空へ花崗岩の言葉を書きちらして低く横はつた陸地、
一夜の港、夜の空を背景にした青黒い山の肩、
又ちら〳〵する燈火の一群、九万の人間が此処にゐた。
水曜日の夜を雨にずぶぬれの外套やゴム靴の幾千人、
己は自分が街路や群集にどんなに餓えてゐたかを知つた。

……

ほかの何よりも寧ろ水で己はありたかつた。
北大西洋の塩からい霧と霧の流れや、朝の灰色の中で雲のやうにどんよりした氷山を己れは見た。
諾威（ノルウィ）の峡江（フィヨルド）の夢の溜りを己は見た……それから岩の上や岩棚のへりで舞踏する水のスカアフも己れは見た。

……

諾威（ノルウィ）の山の墓場へ己を埋めろ。
三枚の水の舌がそれをめぐつて、山から来た雪と一緒に歌ふのだ。

北大西洋へ己を埋めろ。
アイスランドからやつて来た霧が己の上で灰色に囁く事だらう、又長い深い風が何時も啜り泣く事だらう。

イリノイズの玉蜀黍畑へ己へを埋めろ。
冬の刈株の上へそのパイプオルガンの独奏をまきちらす吹雪や、春の雨や秋雨（あきさめ）が、海からのたよりを持つて来るのだ。

（ベルゲンにて／「現代詩」昭11・5）

ジャン・アジャルベール

オーヴェルニュの歌

ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、

ロー、ロー、レロ、ロー！

これがグランドだ、山人の歌だ。言葉は無い。何のために言葉が要らう！　有るのは節だけ……　だが其の節にこそ「山」のたましひは籠つてゐる。

ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、レロ、ロー！

これがすべてだ。

嗄れた繰返しの断片、ぎごちない節廻し、問題にもならぬ少しばかりの貧しい音符、田舎くさい発声法、三つか四つの音、襤褸のやうな楽節。だが常に同じで、しかも深く、多くの事を物語る此の楽節のきれはしには、実に多様の趣きがある。場所によつては憂鬱にも、荒つぽくも、野蛮にもなり、歌ひ手によつては悲痛にも、乱暴にも、残酷にもきこえ、また時の経過につれて、黎明には黎明の色に染まり、正午には正午にいろどられ、夕暮ともなれば又その灰色に包まれる……

ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、レロ、ロー！

聴きたまへ。

六ケ月も続いた冬の寒さと、暗さと、麻痺との後、突如として春がかゞやく。

あたらしい太陽は厚い積雪を溶かした。

急流が解きはなたれて、気違ひじみた水をながす。

再生の喜悦がほんのり温い大空で脈動する。牧畜の群はうすぐらい小屋を捨て、急坂を攀ぢのぼつて、あの上の方、空の間近かの自由な牧場へと向つて行く……

犬共は体から湯気をたて、その頸輪の釘のやうに毛を逆立てゝ燃える眼をして長い隊伍のまはりで吠える。すると家畜の鳴声や鈴のカランカランいふ響のなかで、これもまた大地の強い芳香に酔つぱらつた無口な牧者が、胸にいつぱいな複雑な感情を溢れ出させて、とつぜん肺の力のありつたけで歌ひはじめる。まるで自然の栄光への、憤然とした素朴な讃歌のやうに。

ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、レロ、ロー！

聴きたまへ。

夏の一日、君は耕地や森林の地帯を過ぎ、ヒースやえにしだの山腹を攀ぢて、不毛の台地を横断する。そこでは乾からびた細い流が三伏の暑熱の下でのたうつてゐる。物音といへば、まるで大地そのものが爆ぜる音か軋る音のやうな、密集してうごめく昆虫の声ばかり。また、時には、君の接近に巣から舞上つた鷲鳥の、二声か三声の甲高い叫びばかり……

君は進む。この憂鬱な寂しさに襲はれ、この死と永遠との曠漠とした沈黙に悩まされて、やうやく不安になりはじめた心を抱きながら。すると、とつぜん、一人の牧者の裏声が空間と地の広がりを引裂く……　グランドだ！響いて返つて来るやうに、忠実な木魂に向けて彼の投げたあの歌だ……　ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、レロ、ロー！　そして無理に押出されたやうなかぼそい声音をもつ此の叫び、大地の襞のうしろに匿れてゐる小さい牧者の此の金切声は、岩から雲まで空間を満たしながら、近くに羊飼の小屋のある事を、此の高い寂寞境に、六月から九月までは幾らかの人間によつて営まれる生活のある事を――原始的な、遊牧の、聖書的な、牧人種族の人間ではあるが――ともかくも天地の界で野営をするために山頂めがけて登つて来た、少数の人間の生活のある事を知らせるのだ……

ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、レロ、ロー！

聴きたまへ。

農夫が家畜を送り出して野良で働く楽しい幾週間、此の地方をへめぐる旅の行くさきざきで、まるで深淵から迸るか、雲と一緒に流れでもするやうに、谷底から上り、山から落ちて来るグランドを、君は此処彼処で聴くだらう。

ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、ロー、レロ、ロー！

聴きたまへ。

（「山小屋」昭13・2）

ヘンリー・ヘーク

山の夏の朝

朝のあの清々しさを君は知つてゐるか。
八月の、八月の最初の週の、
山の中での或る夏の朝の
ひかりきらめく明るさを。
夜中に雨が降つた、
小径はまだ湿つて
牧場は湯気を立てゝゐる……
下の方のこんもり円い山頂には
雲の綿毛がよこたはつてゐる。
高い山々は未だ灰色の密雲にとざゝれて、
わづかに氷河がたつた一つ
其のあひだから光つてゐる、
空には毛のやうな雲が遊んでゐる。
僕等が三月の日当りの丘で
残雪のすぐそばに見つけた
早咲きの小さい龍膽の花、
あの小さい龍膽の花の碧さを
さながらに光つて碧い大空だ。
森や、牧場や、岩壁や、
緑玉のやうな湖水の上の、
日光の斑点と雲の影。
地面の方へたわんだすべての茎や
すべての葉末に虹を噴く露の点滴……
新しく降つた雪よりもなほ白い
雲の花から出て音もなく
輪を画がいてゐる一羽の大鷹。
あゝ、静けさと、憩ひと、清々しさ……
それにまた至福の太陽と
夏の喜びとの約束だ。

（詩集『山と漂泊の歌』／「文庫」昭16・8）

山の夕暮

遠い万年雪の上には最後の光が輝いてゐる。
そして夕暮と共に静寂が来る。
黄昏は灰いろの面紗をひろげ
暗黒は谷底へ流れあつまる。
一羽の晩い白い蝶がひらひらと不安げに飛ぶ。
山羊の群が張切つた乳房を小屋の方へ曳きずつて行く。
疲れた男が一人、重い足どりで山から下りて来る。
暗黒がたちのぼる……
山々の黒いかたまりは朦朧として、
澄みわたつた星空の絨氈をぎざぎざと刻んでゐる。
一陣の新鮮な風が氷河から吹いて来る。
それがせゝらぎの遠い微かな囁きを運んで来る。
それが清らかな高峻の荒い息吹を運んで来る。

（詩集『山と漂泊の歌』／「文庫」昭16・9）

エドヴァルト・メーリケ

ランプ

なほもじつと動かずに、美しいランプよ、
おんみは軽い鎖から優美に吊られて、
今ではほとんど忘れられた愉楽の部屋の
この天井を飾つてゐる。
縁のところを金緑色の唐金の
きづたの花環で編みつつんだ
おんみの白い大理石の鉢の上には
一群の子供の輪舞が楽しげに絡まつてゐる。
なんとすべてが愛らしく
なんとすべてがほほえましい事だらう！
しかも全体を包んで真摯なものの
なごやかな精神がみなぎつてゐる。
これこそは純粋な形式をもつ一つの芸術品。
誰がこれを褒め敬ふか。
しかし美はそれ自身のうちに
清く悦ばしげに輝いてゐる。

（「つめくさ」一七号、昭27・1）

スティーヴン・スペンダー

私は真に偉大であつた人々を…

私は真に偉大であつた人々の事をたえず思う。
時間が無限であり　歌う太陽であるあの光の
廻廊をとおして
霊魂の歴史を遺し伝えた人々の事を。
彼等の美しい野心は　その唇がつねに火に触れて
頭から足の先まで歌に包まれた精神について
語る事だった。
そして彼等は自分たちの肉体を横ぎって
花のように散りかかるさまざまな欲望を
春の枝から取りあつめたのだった。
尊ぶべきは　我等の地球以前の世界の巌をう

がって
老いることのない泉から引かれた血の本質的な喜びを
けっして忘れないという事だ。
朝の卒直な光のなかでの快楽も
愛にたいする厳粛な夕べの要求も拒ばない事だ。
騒音や濃霧によって徐々に交通を麻痺させたり、
精神の開花を窒息させたりしない事だ。
雪のかたわら　太陽に近く　高山の一角で
波打つ草や　白い雲の吹流しや
耳傾けている大空の風のささやきから
どんなに彼等の名がことほがれているかを見るがいい、
その一生を生命のために戦った人々、
その心臓に火の中心を持っていた人々の名が。
彼等は太陽から生まれて　しばし太陽に向けて旅をつづけ、
そしてその名誉をもって署名された生々たる空気を後に残して去ったのだ。

海　景

（M・A・Sの思い出に）

この幾日　楽しげな大海は、陸の脚下に、
奏でられない竪琴のように横たわっている。
午後は、目に炎々と燃える音楽となって、
その沈黙した絃のすべてを輝かせている。
みなぎりわたる焔の間にきらきら光る鏡の上では
薔薇の花や馬や尖塔を積んだ岸が
水面をさすらい　砂の畝間を歩いている。
熱い天空は萎え疲れて微動だもしない。
女の吐息のように内陸から洩れて来る一陣の風の息が
その絃の上に鷗らの鋭い叫びや　鐘の音や
生垣をめぐらせた遠い諸州の人声を運びながら、
影のある手でこの楽器を吹きかすめる。
そしてこれらの物を　錨のように深く　音もない波が埋める。
その時、岸のほうから　散りばう野薔薇の花のような
ジグザグに飛ぶ二羽の蝶が明るい浜辺を横ぎって
気の狂ったようにくるくると海上を旋転しながらやがて水に映った空の中へ落ちてゆく。
彼等は溺死する。しかし漁夫達にはわかるのだ、
あの海底の伝説、溺れた町々の伝説を思い出す彼等には
こんな翼がこんな葬礼のいけにえとして沈んで行った意味が。
そもそもどれだけの旅人を、羽根をかざした兜をかぶって
茶毘の火のように燃えながら何処かの島を船出した
ああ　どれだけの英雄達を　この海は呑みこんだことだろう。
残酷な波の欲望に引きゆがめられた彼等の眼は
ほとんど歌もない潮の底に金貨と共に光っている
そしてその間にも　彼等の上で　あの竪琴が
彼等の吐息を吸っている。

訳詩に添えて

尾崎喜八記

九月三日の現代詩人会のリセプションで国際ペン大会に英国代表として来朝中の詩人スティーヴン・スペンダーに会う事のできたのはやはりよかった。

安藤一郎君に紹介してもらっての初対面だったが、それから後はテイブルが同じだったので予期以上にいろいろと話ができた。いかにもイギリス人らしい白皙長身、健康そうにエネルギッシュで品位があって、聡明と誠実との直ちに見て取れる美しい眼と額、時間や気持の多忙の中でも相手の言うところを正面から聴いて、まじめに卒直に答える態度や気持がもつとも立派で印象に残つた。著書と著者とが一体だつた。まさに二つの「要素」や「一篇の詩の成る時」や、自伝「世界の中の世界」や、全詩集などから私の造り上げていた人間像、詩人スティーヴン・スペンダーにまぎれもなかつた。

最後にその日のために綺麗に清書して持つて行つた彼の詩の飜訳二三を見せながら、一つ二つ字句の上の疑義を正した。本誌に訳載した三篇がすなわちそれだが、差し当りこの三つを選んだ事を眼を

輝かせて喜んでくれた。これらの詩にむしろドイツ的なもの、なかんずく或るリルケやフランツ・ヴェルフェル的なものを感じると言ったら、微笑をもって私の眼に見入りながら強くうなづいた。私の贈った詩集「花咲ける孤独」の表紙から Solitude en fleur という仏訳の題を見出して、いい題だ、内容が想像できる気がすると言った。彼の詩をぼつぼつ訳していつか一冊に纏めて出版させたいがと言ったら、喜んで同意すると答えた。

おのが影の長々と地に横たわり、しかも心は詩的宇宙に打ち興じて、精神もまた冷めたい空の中心で燃えながら歌うこの生涯の夕暮に、一人のスペンダーに会った事はやはり美しい体験だった。

（「季節」昭32・11）

未発表草稿

「カロッサ詩集」譯稿

編集部注 尾崎の書斎の書棚には数枚の肖像写真が小さい額ぶちに入れて飾ってある。その内の四枚はフランスのロマン・ロラン、デュアメル、ヴィルドラック、マルチネであり、後の二枚はドイツのヘッセ、カロッサである。カロッサ以外は皆直接本人から贈られたものであるが、カロッサを好きであった尾崎は何かの雑誌から切り取ったものらしく、アート紙に印刷されたものが額に入れてある。

今回の特集の為に、たしかにカロッサの詩を数篇訳したノートがあった筈だと思い探していたが、それは出版社に渡す状態に綴じられた Robert Mallet（ロベール） 著の『今日の詩人達』叢書の一巻「フランシス・ジャム評伝」の完訳原稿とともに篋底にしまわれていた。

ノートには一九五六年（昭和三十一）七月二十五日から八月六日にわたって訳した十三篇と九月二十二日訳の「女囚と老人」が書き込まれていた。尾崎が譯稿ノートに書き始めたすぐ後、九月十二日にハンス・カロッサは七十八歳で昇天している。

ここに十三篇の訳詩を活字にすることは、もしかしたら尾崎の意に沿わない事かもしれない。活字にするためにはもっと推敲をするつもりだったのかもしれないのだから。

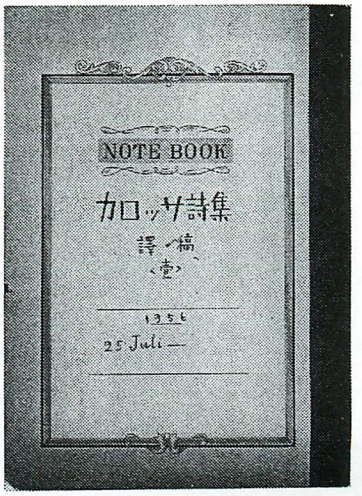
岸べの森に身をひそめて

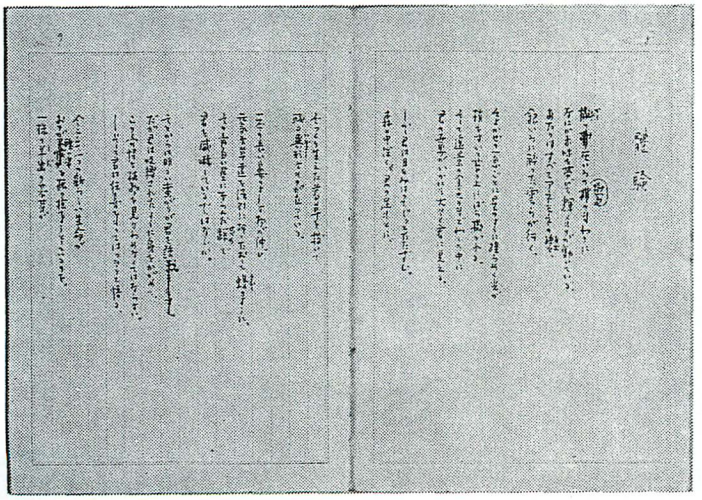
岸べの森に身をひそめて
朝の太陽は横たわっていた。
われらの舟はみぎわを離れた。
太陽は水におどりこみ、
われらのために流の上の
きらきら輝く先達となった。

（昭和三十一年七月二十五日訳）

そしてなんと多くの夜々を

そしてなんと多くの夜々を
私が眼を覚ましたことだろう、
月光はいとも明るく寐台や戸棚を照らしていた！
私はそとの谷間を眺めた。





――そなたの家が夢のさやけさで立っていた――
それで私はもういちど
前よりも深い夢の眠りにおちていった。

（七月二十五日訳）

帰途

私の庭はたそがれたろうか。
川は瀬音を立てはじめたろうか。
私のいのちは今もなお
おんみのくちづけのために燃えている。

おんみによって明るくされた私の眼は
まだおんみを飲んでいる、
此の世のすべての魅力のなかで
ただおんみの魅力だけを。

月の夢は
大空を息づき、
青じろく漂うひとひらの雲の
そのへりが緑の色に溶けてゆく。

水は夜のかなたから
氷塊をはこび、
すべての氷塊は
光の重荷をになっている。

並木道では
電線の竪琴がうなっている。
雪の中に
車のわだちが光っている。

それは光りながら　神々しく
うしろのほう　おんみへの道を示している。
――私は知っている、おんみが深く深く
幸福にひたってまだ眠らずにいる事を。

おんみのランプの笠は
葡萄酒の色におんみを染め、
窓に凍てついた氷の中へ
おんみは柔かに息をつく。

川のこなたへと
おんみの眼が夢想を送る、
――おんみは私のくちづけのために
今こそほんとうに生きている。

（七月二十六日訳）

星の歌

あすともなれば無数の星が輝くだろう。
あすともなれば私を思ってあなたは泣き、
死の窓をのぞきこむだろう。
それから遠い光へと高くのがれて行くだろう。
そして幾千の星々が、
静かな小さい星のことごとくが、
太陽のように大きく光って顫えるのを
二粒の澄んだ涙をとおしてあなたは眺めることだろう。

（七月二十六日訳）

青く溶けた輪廓をもつ

青く溶けた輪廓をもつほのじろい月が
昼のように明るい土地の上に浮かんでいた。
水を飲もうとして私が狭間を攀じて行くと、
その光がひそやかに強く照りはじめた。
今ふかぶかと暗い泉の底で
それはたそがれのように光っている。

（七月二十六日訳）

体験

栂の灰いろの樹冠のまわりに
なにか赤味を帯びて輝くものが動いている。
あたりはすべてアネモネの碧、
銀いろに酔った雲らが行く、
そよかぜの一息ごとに星のように揺らめく
光が
梢をすいて苔の上にばら撒かれる。
そして遠景の金色のまどわしの中に
君の世界がいかにも大きく君に見える。
しかし君は目をみはってじっとたたずむ。
森の中深く　君の足もとに、
ぞっくり生えた若草を抜いて
或る異形なものが立っている。
一本の長い鼻のような物が伸び、

元気な草達を強引に押したおして、蝮のように、
その青白い茎にならんだ距で
君を威嚇しているではないか。

そとからは明るい広がりが君を誘う。
だが君は呪縛されたように身をかがめて、
この奇怪な植物を見きわめなくてはならない。
――そして君は狂喜をもってはっきりと悟る。

今ここで一つの新らしい生命が
おのが醜い姿を振り捨てようとしているのを。
一株の羊歯の若芽が
ひそかに未来の翼を予告しているところだと
いふ事を。

そして君は感じる、此の世で子供の頃にさえ
こんなにも温かい感じに打たれた事の無かっ
たことを、
そして一つの見馴れぬ低級な生命の発展が
君に全く近く、君と血のつながりを持って
いるということを。

鱗が君の眼から落ちる。
君は母の霊に触れる。
君自身を貫いて循環しているように
君の最も鈍い兄弟をも貫流している母の霊に。

君はたたずむ。そしてすべての君の注目が
けだかい謙譲へと帰ってゆき、
或る限りない信頼の情が
大地の子　君をはげしく震撼する。

（七月二十七日訳）

一羽の蝶に

太陽が森のまわりで香の煙を上げている時、
蝶よ、お前はまだ喪に服している。
氷のような湿めり気にその軽い翅を縛められ
たお前は、
危険な気弱さから来る麻痺の中で
自分を死の手にゆだねようというのか。
おゝ、目をさませ、そして耐えよ！
お前の救い主、日光はすぐそばで燃えてい
る！　もう少しだ。
じきにその翅の絹のような粉がかわく。
そしてまだ死に手出しをされた事のない他の
生物よりも更に深く温まって、
お前の魂を完成させる昼間の空へ飛び立つ事
ができるのだ。

（七月二十七日訳）

春

今太陽はふたたび本寺広場の空に懸かり、
子供らは古い噴水のまわりで遊んでいる。
一群の鳩が石段の上であかがね色に輝き、
いっぱいに光を吸った海綿のように重たく
雲のむれが浮かんでいる。春だ。

本寺広場にむかって開いた窓際に
ひとりの蒼ざめた娘が毎日毎日坐っている。
彼女は雲も見なければ美しい鳩も見ない――
自分については何一つ知らない女達のために
日がな一日、ときどきは夜の夜更けまで、
衣裳を考案し、絹の帽子を作っているのだ。
そしてその顔はいつもいつも冷めたく厳しい。
ただ時おり　心臓の下に　彼女の子供の
彼女の胎児のいともかすかな鼓動がして、
漠然とした小さい魂が早くも光を手探りして
いるかと思われる時、
その時痛ましい唇が火と燃える。春だ。

（七月二十七日訳）

もろい氷の塊が

もろい氷の塊が河岸をかすめて流れる。
雪のしたたりが傾斜した崖を落ちる。
銀いろの芽を出した黒い樹々が
拘束のない光のなかに立っている。
波は波を押し進め、
ひとつの波は他の波へとおのが輝きを残して
行く。
その広々とした河の流れに、
大理石のような大きな雲と
灰色の翼を持った大空の放浪者である鶴の群
とが、
ゆっくりとついて行く。

（七月二十八日訳）

私のベンチの見知らぬ女

この見知らぬ女はどうして私のベンチへ来た

のだろう。
雷雨があらゆる方角からこの公園へ近づいている。
女は眠っている。ひどく年を取っているらしい。年も取り、病気でもあるらしい。
撞木杖が痩せ衰えた手からすべり落ちている。
園丁がぴかぴか光る真鍮の如露から
植込や花壇へつめたい水を雨と降らせる。
涼しさが向うの家までひろがってゆく。——
眠っている女の姿がちらちら光る霧にぼやける。

密雲が重たくのしかかる。
雲はその灼熱をいよいよ近く地面へ押しつける。
しかしもう一度雲の黄いろい裂目から
日光が斜めに洩れると、もう一度
暗黒が昼間に変ったように思われる。——と
見よ、おゝ其の時、
霧のようにひろがった水蒸気の中で、
白毛まじりのあわれな女の頭の上に細長く
七色の弓形が驚くばかり燦然と輝き出す。

（七月二十八日訳）

盲人

日光は夏の林にさしこみ、
人々はなま暖かい砂を踏んで歩いている。
しかし林のそとで　樹々を背にして、
明るく暑い路の上に
手風琴を持った盲人が立ち、
光明のなかへその陰気な歌を歌っている。

風は白樺の梢に沈黙し、
おどけ者の啄木鳥は叩くことを忘れている。
——ただ人間だけは、人間だけは、
立ちどまろうともせず、耳を傾けるすべも知らず、
たがいにしゃべり事が多すぎ、
うなずき合う事が多すぎるままに、行き過ぎる。
そして盲人は光明のなかへ歌っている。

しかしはだしのままの一人の少女、
灰色の着物を着た顔色の悪い一人の少女が
暑熱の路上へ思いきって出て来て、
一束の野生の花、
空色をした暗く涼しい釣鐘草を、
ほこりをかぶった手風琴の函の上へ投げて行く。
そして盲人は光明のなかへ歌っている。

（七月二十九日訳）

水中の空

牧場の奥に沼が黒く横たわっていた。
岸にはただ一本の赤楊が影を落としていた。
私は子供だった。むし暑い春が来て
牧場が黄いろくなり、硝子細工のような粗野な蜻蛉が草木の葉にかじりつくようになると、
私は沼のふちへ行って喜んで寐ころび、
身を乗り出して水底をのぞきこんだ。
それは空のように深かった。

なんという雲が其処を通り過ぎたことだろう。
灰色で、榧の葉のように深く切れこんで、
一方のへりが青く光っていた！
ときどき美しい太陽が現れた。
まぶしいどころか寧ろやさしく穏かで、
まるで満月のようだった。

私は思いついた、赤楊の緑の鞭で
私の水中の空を打ちこわしてやることを。
——
すると大きな白い太陽がこなごなに砕け、
銀いろに輝く無数のしずくとなって
岸のところまで飛び散った。
私の心臓は不安にかられて動悸を打った。然
ししずくは、
銀いろに輝く無数のしずくは、
たがいに揺れながら　しだいに近寄り、
しだいに静かにおさまって、やがて全体がもう一度一つの白い太陽になった。

（七月三十日訳）

水の岸の精霊と蝶

私は一箇の精霊だ。この河の狭間の多い水岸に、
みじかい期間だが魔法にかかって閉じこめられている。

岸では蘆が褐色の花を咲かせ、
とんぼが熱せられた青い針のように私を縫って飛び、
おりおり力のない人間の歌声が
観る者である私のまわりに響いて来る。

終りもなく　始めもなく、それ自身として形もなく、
たださまざまな形象の中に生きて物思う始源の霊が、
私を空気中へ呼び出した。
彼女は私にまだたくさんのたくさんの段階があって、
それが次第に私を純粋に清新にするものである事を知っている。
結局は私も清らかな火として
昔ながらの焔と合体して燃えるのだ、
私の幸福が実現し、聖なる遍歴が果たされた時。

あゝ、時間の歩みよ！　地上に縛められている事の幸福よ！
私は光から生れた自分の力がこんなにも大きく、
こんなにも楽々と魚類や波の上にある事を感じる！
だがあの水際で、灰色をした柳の樹皮の
黄ばんだ色調を破っているのはなんだろう。
深紅の帯に金青色をした二枚の翅、
それが時どき瞑想しているように静かに動くが、
今はまるで喜びの大波が通ったように
かすかに玉虫色に光りながら開いている。
そうだ、わかった。あれは蝶だ。
光線に恵まれ陶酔したように生活して、
他の何物をも害さない生き物、私の血縁だ。
おゝ、なんと彼が霊気を吸っている事だろう！
熟した苺のように強い匂で彼は周囲の空気を薫らせている。
――しかし静かに！　その珍らしいいろどりの魅力が
もう水の中から一人の敵をおびき寄せる。
水辺の種族、乱暴な裸の少年どもを。
彼等はみんな此の明るい宝石を取りたがるのだ。
あぶない！　私は精霊の権利の一つを行使する。
私は蝶のまわりをぐるぐる廻ってそっと息を吹きかけ、
その翅をきわめて軽く閉じさせる。
彼が一瞬にしてがさがさな樹皮と見まごうばかりになるように。
捕吏の一人ははっとすると、疑うように身をかがめて、
眼を半眼にしながら木や蘆に触れてみる。
その間に別の子供は貝を見つける。
美しい蝶よ、やがてお前は忘れられる。
今こそまず大いなる喜びでお前をよく観察させてくれ！
一見灰いろに見える翅の裏面に、
ふしぎな金色の文字が、唐草模様の網がまつわっている。
そしてその模様はきゃしゃに精緻に連続されて、
音響に生気づけられた板硝子の上の軽い砂のようだ。
だが私にとってそれが何という奇蹟だろう！
金色の文字は輝きのぼる。――私にはそれを読むことができる！
空気を、火を、水を、石を、自分自身の本質を、
今こそ私は悩ましくも恍惚として学び知るのだ。
――否、否！　行ってしまえ！　私は学びたくも選びたくもない！
何か熱烈なもの、循環するものが私をおさえつけようとしている。
この精霊の役目を振り切って逃げ出さなければならない。
――どこへ？　それはわからないが、ただ感じてはいる。
一つの見知らぬ国が灼熱の道へと私を誘っていることを。
それは揺れながら下降する。私の霊気の血潮が温熱を増して、
私は燃える。――停まれ！　逃げるな！　じっとしていてくれ、金色の蝶よ！
もう一目だけお前の魔の書物を見せてくれ！
だが彼はひらひらと飛び去って、歎願も呪詛も引きとめ得ない。――

（八月六日訳）

尾崎喜八、訳詩の精神史

雑誌寄稿一覧表・訳書一覧
翻訳詩篇・凡例・解題

嘉納忠明

尾崎喜八訳詩 雑誌寄稿一覧表

無括弧＝詩篇 ( )付＝散文

作家	大5～10	11～15	昭2～5	6～16	17～20	21～27	28～42
ホイットマン	(1)						
ユーゴー		2					
ヴェルハーラン		5	2(1)			1	
マルチネ		1	14*	1			
ジューヴ		(3)	11	2			2
ジュール・ロマン			5				
デュアメル			8(7)	(2)		(13)	(11)
ヴィルドラック			7(2)	2			
アルコス				1			
イヴォンヌ・エルマン・ジルソン			3				
マルク・ド・ラレギー			1				
ジャン・ド・サンプリ			1				
エルンスト・トラー			2				
ヘッセ			1	2(3)			(5)
アンドレ・スピィル			3				
サンドバーク				3			
アジャルベール				1			(1)
ヘンリー・ヘーク				3			
リルケ					1	1	10
メーリケ						1	
カロッサ							1
スペンダー							3

作家	大5～10	11～15	昭2～5	6～16	17～20	21～27	28～42
マーテルリンク						(1)	
ロマン・ロラン	(15)	(1)	(1)				
ペルリオーズ	(20)	(7)					
ギゼッペ・マッチーニ	(2)						
リヒャルト・ワグナー	(1)						
ロバート・シューマン		(1)					
ロダン		(1)					
アンドレ・ド・ポンシュヴィユ		(2)					
レオン・ウェルト			(3)				
ルシェン・プライス			(1)				
バザルジェット			(1)	(1)			
ジオノ				(1)			
アンドレ・シュアレス				(1)			
ジャヴェル			(1)	(7)			
ドゥラマン				(4)			
F・S・スマイス				(1)			(4)
C・F・タルマン				(1)			
シトン・ゴードン					(1)		
ヴァッガール							(1)
小計	(39)	8 (15)	58 (17)	15 (21)	1 (1)	3 (14)	16 (22)

＊この内8篇、訳者名なし。推定。
集計は、「尾崎喜八資料」の新聞雑誌掲載目録を元にしている。

訳書一覧（選集・共著除く）

大5ロマン・ロラン　近代音楽家評傳
大9ベルリオ　自傳と書翰
大9ベルリオ　ベェトーヱンの交響樂の批判的研究
（以上英訳より重訳　以降は原書訳出）
昭2ロマン・ロラン　花の復活祭
昭3ヴィルドラック選詩集
昭12ジャヴェル　一登山家の思ひ出
昭14ヘッセ　ヴンデルング
昭15デュアメル　北方の歌
昭15ヘッセ全集10　母に歸る
昭16デュアメル　阿蘭陀組曲
昭16デュアメル　モスコウの旅
昭17ヘッセ　畫家の詩
昭21ヴィルドラック選詩集（改訂）
昭21マアテルリンク　悦ばしき時
昭23ロマン・ロラン　花の復活祭
昭27ジャヴェル　一登山家の思ひ出（文庫）
昭28デュアメル　阿蘭陀組曲・北方の歌（文庫）
昭28デュアメル　わが庭の寓話
昭29ヘッセ　さすらいの記（昭15版全集10）
昭30新訳ヘッセ詩集（一五三篇）
昭30リルケ詩集
昭32ヘッセ・ワンデルング（改訂）
昭33ヘッセ全集17　詩集（二九九篇）
昭34リルケ　時禱詩集
昭35ヴァッガール　牧場の本
昭38デュアメル　わが庭の寓話・動物譚と植物誌
昭38デュアメル　慰めの音楽
昭39ヘッセ　画と随想の本
昭40新訳ジャム詩集
昭41ヘッセ詩集（昭33版十一篇）
昭42ヘッセ詩集（一一五篇）
昭42ヘッセ　さすらいの記（昭29版新装）
昭46ヘッセ詩集（昭42版新装）
昭48ヘッセ　さすらいの記（ヴンデルング十画と随想の本、文庫）
昭51デュアメル十尾崎喜八　わが庭の寓話

翻訳詩篇（原著者別・雑誌寄稿一覧）

・印　単行本に収録されたもの

ヴィクトル・ユーゴー
寒い　大11
大玄関の下の雛　大11
エミール・ヴェルハーラン
荷車の挽子　大13
歓喜　大14
寛仁　大14
村　大14
森林　大14
熱狂　昭3
キヨエニヒスベルクにて（散文詩）
美しい雲　昭21｜昭3
マルセル・マルチネ
光明の最初の日　大15
河、村落、丘陵　昭3
千九百十八年十一月十一日月曜日
春のイマアジュ　昭3｜昭3
自由　昭3
星　昭3
真夜中に　昭3
地中海　昭4
地中海　昭6
マルク・ド・ラレギー
死者の傍らに立つて！　昭2
ジャン・ド・サンブリ
彼は僕に云つた　昭2
ピエール・ジャン・ジューヴ
モーツァルト　昭2
「砂漠」抄（一〇篇）　昭3
ガイド　昭9
雪　昭31
・カプツィーネルベルク　昭31
・ジュピター交響曲
ジュール・ロマン
詩集「ウーロップ」から　昭2
私は現代の悲惨を　昭4
コモの湖水の四羽の家鴨　昭4
アノオル　昭4
まだ夕暮に　昭4
ジョルジュ・デュアメル
フロランタン・プリュニエの譚詩
喉に負傷した男の譚詩　昭2｜昭2
昔、私はくゆらす事を好んだ　昭2
それは五月の或朝だった　昭2
焔と光　昭4
会見　昭4
旅　昭4
もしも落胆した冬が　昭4
シャルル・ヴィルドラック
・風景　昭2
・或る友情　昭2
・冬の歌　昭3
・白い大鳥　昭3
今度の時には　昭4
或る死者に　昭4
・庭　昭4
親しい民衆よ　昭7
・モンブランヴィール　昭9
エルンスト・トラー
森　昭3
牢獄の中庭を通る懐妊の娘　昭3
ヘルマン・ヘッセ
少女が家にゐて歌ふ　昭4
・田舎の墓地　昭14
・高山の夕暮　昭15
イヴォンヌ・エルマン・ジルソン
ワロンの村々　昭4
踊りまはる風は　昭4
秋　昭4
アンドレ・スビィル
石　昭5
君達の間に　昭5
つれづれ　昭5
ルネ・アルコス
或る友の思ひ出に　昭7
カルル・サンドバーク
バルチック海の靄の覚書　昭11
水牛のたそがれ　昭11
ペンシルヴァニア　昭11
ジャン・アジャルベール
オーヴェルニュの歌（散文詩）　昭13
ヘンリー・ヘーク
山の夏の朝　昭15
山の夏の朝　昭16
山の夕暮　昭16
ライナア・マリヤ・リルケ
・番人が葡萄園に　昭18

・月夜　昭23
・「リルケ詩抄」（一〇篇）　昭30
エドヴァルト・メーリケ
ランプ　昭27
ハンス・カロッサ
・女囚と老人　昭31
スティーヴン・スペンダー
私は真に偉大であった人々を　昭32
ヘルダーリンの晩年　昭32
海景　昭32
作者不詳、クロード・オージェ編「仏蘭西小学校唱歌教材」より
仏蘭西の花売り　大14

別項「訳書一覧」を参照）。

凡例

・本号特集の「尾崎喜八・訳詩抄」は、「尾崎喜八資料」の新聞・雑誌掲載目録に集録された中から、尾崎の刊行本に採録されていないものを作家別に一篇乃至二篇とり挙げてある。
・原著者名は、便宜上、現行表記に変えた。
・原詩の出典が記されているものは本文の後に翻訳の発表誌・号と共に併記した。
・詩篇本文だけでなく、訳者による解説・紹介等も発表時の状況を知る為の参考として採録した。
・別表「尾崎喜八訳詩・雑誌寄稿一覧表」の寄稿数値は、即訳業の全てを表わすものではない。『新訳ジャム詩集』やヘッセの詩のように全く訳し下ろしの仕事もあり、それらは含まれていない（これらについては、

解題

尾崎喜八の詩作の特徴の一つに、ヨーロッパ文学の受容が挙げられる。ロマン・ロランを初め、ヴィルドラック、ヘルマン・ヘッセ等フランス、ドイツの作家への並なみならぬ傾倒や熱い共鳴が、尾崎の個性の形成と開花に大きく与っている、と誰もが認めるところである。しかし、その一々の関わりについては未だ十分明らかにされたとは言えず、まとまった考察も少ない。僅かに、渡辺勝氏の「ヘッセと尾崎喜八」（『欧米作家と日本近代文学4』）、「日本のヘッセ受容」（「ユリイカ」昭57・4）、「ヘッセと日本人――尾崎喜八のことなど」（『ヘルマン・ヘッセをめぐって――その深層心理と人間像』）等の一連の研究、富士川英郎氏「尾崎喜八とドイツ詩人」（「尾崎喜八資料4」）等が数えられる。そこで解明の一端として、尾崎の翻訳の跡を辿ることにする。

尾崎の訳業は、大きく三つの時期に分けられる。(1)大正期、(2)昭和戦前期、(3)昭和戦後期である。

大正期の尾崎は専ら英語訳本から吸収し、訳出した。翻訳の試みは、大正三年頃、勤め先の文学青年達の回覧誌の中で始まっていたが、記録すべき第一歩は、大正四年二十三歳の誕生日に、ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』――「新しき曙」の一節を訳出したことである（この訳出は『近代音楽家評傳』の巻頭に付けられ、又、『音楽への愛と感謝』の「音楽に寄す」の中にも挿入されている）。

その後、雑誌「白樺」に、大正五年四月からロラン、ベルリオーズ等の音楽評伝を次つぎに訳出し、近代美術の移入に熱心であった白樺派の人達の中では数少ない西洋音楽の紹介者となる。尾崎の初期の活躍は、主に「白樺」であったが、詩人としての登場は大正九年のことで、それまでは訳業が大部分を占めている。

大正期の中で特筆すべきことは、ロマン・ロランに寄贈した第一詩集『空と樹木』への返書が届いたことであり、そのロランを介して、大正十五年四月に来日したヴィルドラックとの出会いがある。ロランとの文通は、日本でのロマン・ロランの会（後に大正十五年一月に発起されたロマン・ロラン友の会とは別個のもの）を生むエネルギーとなり、ヴィルドラックとの交流は、後述の如く、尾崎のヨーロッパへの傾倒を一層燃えたたせ拡大させることになった。このことは尾崎にとって、英語の他にフランス語の習得を促し、又、片山敏彦からヘルマン・ヘッセ及びドイツ語習得を啓発される機縁になる。

昭和戦前期に入ると、訳業は英訳本からの重訳が、原書からの直の訳出となる。その最初の成果が、昭和二年刊行のロランの『花の復活祭』で、本邦初訳である。

尾崎のフランス語の習得は、これより以前、『近代音楽家評傳』を訳していた頃には始まっており、大正七年頃には、高村光太郎にすすめられたヴェルハーレンを読むべく、フランス語の教師について学習している。光太郎はやがてヴェルハーレンの訳詩集『明るい時』を大正十年に上梓し、尾崎もそれに応えるかのように、詩「ヴェルアーランを憶う」（初出・エルハアラン祭「日本詩人」大正十一年八月）を発表、評論「ヴェルハアラン」（「明星」大正十五年三月）は光太郎に献じている。

別表「雑誌寄稿一覧表」によれば、昭和二年～五年項の訳業が他の期間に比べて際立って多い。大正期に魅せられたヴェルハーレンは減り、代って、ピエール・ジャン・ジューヴ（昭和二年四十歳、〈尾崎三十五歳〉）、ジュール・ロマン（四十二歳）、デュアメル（四十三歳）、ヴィルドラック（四十五歳）等、フランスのアベイ（僧院）派の詩人に、「ユーロープ」誌のマルチネ（四十歳）が登場する。

一九〇六年から八年にかけて、当時二十代の若さであったアベイ派の彼等は、パリ郊外のクレテイユの旧僧院で、入口に、「アベイ派、芸術家の友好グループ」（『フランス文学辞典』白水社、アベイ派の項・西堀昭）と記した看板を掲げて集まった。ここには前述の詩人達に、アルコス、シェーヌヴィエー

ルも加わり、印刷業などで自給自足をはかり、文学に専心する共同生活を営んだ。ホイットマン、ヴェルハーレンの影響の下に育った彼等は、ヴィルドラックが指摘する「広く人間的な芸術への傾向」（尾崎＝ユナニミスムの詩人『現代詩講座3』昭和四年）をもって詩作し、やがてロマン・ロランのヒューマニズムと結びついていく。

すでに高村光太郎に導かれて前記三人の芸術と思想に近づいていた尾崎が、ヴィルドラックが橋渡ししたアベイ派の詩人や詩に共感を覚えるのは、自然なことである。その上、尾崎自身、夫人や義妹達家族とで高井戸で半農半文学生活を実践中であり、彼等が抱いた理想に共通の親しみをもち、自分達の営為に自信を深めたに違いない。そして、「芸術と生活には画然とした区別がつけられない」（やはり野に置け『詩人の風土』、初出＝大正十五年六月）とまで表明する。

尾崎は、アベイ派の詩人から得た恩恵を昭和十年に出た『山の繪本』の「序にかへて」の中で、次のように述べる。「自分の現在の思想傾向を、自然及び生活へのおのづからなる詩的滲入の仕方を、私はかの仏蘭西のAbbaye（アベイ）の詩人から学んだ。あの芸術と生活への、熱烈で純潔な青春の夢が花と咲いたAbbaye sans abbé（アベイ・サン・ザベ）（院長の無い修道院）の故園から学んだ」と。又、別のところで、「ヴィルドラックの人柄に、じかに触れたことによって、詩人としての自分が、本当になさねばならぬことをハッキリと自覚し、「ひそかなものの裡に、美しい生活をいとなんでゆきたいとの願いが強く心の奥に湧き泉（マヽ）んでくるのを感じた」（出会いのよろこび「大法輪」昭和三十七年一月）と言っている。

かかる尾崎の、芸術と生活の相互依拠の信念は、当時に限られたことではない。第一詩集『空と樹木』から生涯を通じ、一貫して保持したのである。『山の繪本』から自然の喜びを受けとるとき、尾崎の心の底のかかる思いを見逃してはならないだろう。

この期間の旺盛な訳出の殆んどは、「東方」（尾崎喜八）「詩集」（井上康文）「濶葉樹」（中西悟堂）等、尾崎並びに友人が編集発行の同人誌に発表する。尾崎は「東方」の後、個人誌「自由漁夫」（昭和四年七月）を創刊し、バザルジェットを特集している。既述の詩人の他、尾崎と関わりのあるロラン周辺の詩人、作家を記しておきたい。

レオン・ウェルト、ブロック、リュク・デュルタン、フランツ・マズレール、ベルトル・マーン、フランシス・ジュルダン、それにジャン・ジオノ、フランツ・ヴェルフェル。

この時期にあって、別表「雑誌寄稿一覧表」に表われない重要な事が二つある。一つはリルケとの出会い、二つにはヘッセへの傾倒である。

昭和三年に、前年に出た茅野蕭々訳の『リルケ詩抄』――これには浩瀚なリルケ解説が付いている――に出会い、多大の感銘と影響を受けたことは、尾崎自身、克明に明かしているので、ここではヘッセについてのみ述べておきたい。

先述したように、大正十四年頃にヘッセを知ってドイツ語の習得を始め、昭和に入った頃には、『詩集』や小説『ペーター・カーメンチント』を読むまでになった（初めて「郷愁」を読んだころ『夕べの旋律』）。そして、詩「ヘルマン・ヘッセを読む夕暮」（改題＝夕べの泉『詩文集2』）を「東方」昭和三年六月号に、又別題「ヘルマン・ヘッセに」を「詩神」同月号に発表する。三井光弥訳の『シッダルタ』が出ていたが、未だヘッセに関心の薄かった当時では、尾崎の詩は日本に於けるヘッセ受容の先駆者の一人として認めなければならない。

別表の昭和六年から二十年の間、訳出総数並びに訳詩数も大きく減少する。一方、散文は僅かに増え、訳出する作家の選び方も、山のジャヴェル、野鳥のドゥラマン、自然小品のヘッセと、尾崎の志向が自然物へ移っていることを示している。中でも、ジャヴェルの『一登山家の思ひ出』は名訳として高い評価を得ている。

尾崎の関心がヨーロッパ吸収から自然文学へ移行すると共に、傾倒する作家も集約される。『ヴンデルング』『画家の詩』のヘッセ、『北方の歌』『阿蘭陀組曲』等のデュアメル、この二人にリルケ、カロッサを加えると昭和戦後期の傾向が固まってくる。

昭和八年に出た、詩集『旅と滞在』は尾崎の新境地を開拓するとともに独自の個性の形成をみせる。リルケとヘッセの恩恵を受けつつ、視ることの愛、傾聴の心を綴っていく。

追記

＊「詩神」昭和四年五月に尾崎にしては珍しい他人の訳詩についての批判の文章が載っている。紙面の都合で今回は載せられなかった。題名は Quantum mutus ab illo!

＊本書の「未刊行、草稿詩篇拾遺」の原稿の中には、古い雑誌やガリ版刷りからのもあり、判読が難航した部分が各所にあった。雪か雲か分らぬものなどガリ版筆耕時点での誤字もあるかもしれず、読者諸氏からもご教示いただければ幸いである。

参考文献

・吉江喬松編『世界文芸大辞典』
・白水社版『フランス文学辞典』
・ジャン・ルースロ＝露崎俊和訳『フランス詩の歴史』（平成三年）
・木村太郎『詩と信仰』（昭和二十四年）
・『フランス文学講座5・詩』大修館
・尾崎喜八・或る仏蘭西の詩人等「詩神」（昭和三年三月）

尾崎喜八資料　総目録

（創刊号～九号）

注記　［研究と資料］欄において、特に筆者名のないものは、尾崎喜八の文章である。

創刊号（昭和六十年二月）

星座＝尾崎喜八

［創刊に寄せる言葉］

埋れかけの木の実＝串田孫一

発足によせて＝北川太一

作品の生命ということ＝伊藤海彦

［研究と資料］

雑誌『フィルハーモニー』における尾崎喜八

同・解題＝勝畑耕一

尾崎喜八の放送関係資料保存について＝堀隆雄

新聞・雑誌掲載目録（一）　大正四～十二年（以下、「目録」と略記）

同・附記＝嘉納忠明

表紙題字＝草野心平（以下、九号まで同じなので省略）

第二号（昭和六十一年二月）

追分哀歌＝尾崎喜八

［思い出の中の尾崎喜八］

『旅と滞在』の頃――尾崎さんの手紙＝山崎榮治

［研究と資料］

初期の山行きとその周辺についての雑誌掲載随筆

山に行くまで＝「詩文学」昭和五年八月号

高山植物写真図集　武田博士の仕事と人と＝「霧の旅」

秋の山地と懐しい人々＝「雄弁」昭和九年十二月号

旅に生きる＝「文学案内」昭和十一年十二月号

＊

尾崎喜八　録音記録（放送番組）＝堀隆雄

目録（二）、大正十三年～昭和六年

同、附記＝嘉納忠明

この一年の出来事／詩碑・文学碑の案内／その他

第三号（昭和六十二年二月）

彫刻＝尾崎喜八

尾崎さんと高村さん――「聖母子像」をめぐって＝北川太一

［研究と資料］

ロマン・ロランと尾崎喜八

ロマン・ロラン氏からの手紙（大正十一年）、ロマン・ロランの友等に（大正十五年）、或る会合（大正十五年）、大陸をこえて（昭和十年）、偉大なる師への私の感謝（昭和十一年）、渝らぬ感謝（昭和二十八年）

＊

ロマン・ロランと尾崎喜八・関係資料＝嘉納忠明

目録（三）、昭和七年～二十年

同、附記＝嘉納忠明

余白に＝石黒敦彦

この一年の出来事／その他

第四号（一九八八年二月）

特集　尾崎喜八と信州・富士見高原

女のトルソ・大煙突＝尾崎喜八

尾崎喜八氏とドイツ詩人＝富士川英郎

［研究と資料］

富士見日記から（昭和三十四年）、「富士見日記から」の前後に妻実子、娘栄子に送られた葉書（昭和二十五年）、信州の高原三景（昭和三十一年）、山を想う（昭和二十四年）、句誌「白

樺」の選及び講話(昭和二十五年頃)、雪の高原で(昭和二十六年)、富士見の夏草の果てに(昭和三十五年)、高原にて(昭和二十七年)

＊

尾崎喜八と信州・富士見高原　関連資料

高原の詩人　尾崎喜八＝「新女苑」昭和二十七年七月号

農村と協同精神＝町田梓楼　昭和二十七年七月

尾崎喜八と信州・富士見―昭和二十一～二十七年の交流記録＝嘉納忠明

＊

目録(四)　昭和二十一年～三十四年

同、附記＝嘉納忠明

この一年のできごと／その他

第五号（一九八九年二月）

特集　自然についてのエッセイ

老の山旅＝尾崎喜八

雲は流れる…(草野心平さん追悼)＝伊藤海彦

山本太郎君のこと＝富士川英郎

尾崎さんと白菅会＝川崎精雄

尾崎喜八記念館設立に寄せて＝中山政市

［研究と資料］

自然についてのエッセイ

自然の中、武蔵野に光る秋、窓を叩く鳥、五月のメドレイ、早春の山郷、山あるき、峠の早春、山麓の村、山峡の春、早春の田園、遅れた春の日々から、Wild Lifeの本、初心者を山へ、第二章　雲

［資料と回想］

尾崎喜八と戦前の職業野球

こころざし＝尾崎喜八

セネタース時代の思い出＝苅田久徳

附記＝尾崎栄子

＊

目録(五)　昭和三十五年～四十九年

同、附記＝嘉納忠明

この一年のできごと／その他

第六号（一九九〇年二月）

特集　音楽についての対談とエッセイ

イメージ＝尾崎喜八

山岳文学のひとつの逸話＝川崎精雄

忘れ得ぬ牧場＝尾崎喜八

［研究と資料］

「現代ギター」対談、新アスレチック(二)、詩人と音楽、音楽(一)、バッハとシュッツ、バッハへの思い、オルゴール、ピアノに寄せて、私の青春とともに暮らしたレコード

＊

尾崎喜八書誌――初出目録・補遺(一)＝嘉納忠明（以下、補遺と略記）

＊

富士見町の尾崎喜八記念館(仮称)計画の進行状況について＝石黒敦彦

研究会だより

この一年のできごと／その他

第七号（一九九一年二月）

特集1　写真家としての尾崎喜八

特集2　尾崎喜八と宮沢賢治

思ふこと＝尾崎喜八

尾崎喜八への旅　その一＝伊藤海彦

［研究と資料］

尾崎喜八先生と校歌＝名取正義

［生態写真家としての尾崎喜八］

日本生態写真研究会、秋の詩趣、山を歩いて草花を写す、アルス文化叢書「雲」緒言、珍しい雲

［尾崎喜八と宮沢賢治］

雲の中で刈った草(宮沢賢治追悼)、賢治を憶う、NHK教育テレビ現代国語「永訣の朝」

補遺(二)――初出目録補遺(二)新聞雑誌掲載目録補遺、他者解説・案内類＝嘉納忠明

雲とクラドニ図形＝石黒敦彦

尾崎喜八記念館計画の進行状況について(二)

研究会だより＝尾崎栄子

この一年の出来事／編集室から

第八号（一九九三年三月）
尾崎喜八生誕百年記念特別号
尾崎喜八著作年譜＝伊藤海彦・編、三宅岳・撮影
尾崎喜八への旅　その二＝伊藤海彦
平成四年のできごと
富士見町・尾崎喜八記念施設の進行報告、他

第九号（一九九三年十月）
特集　尾崎喜八と串田孫一
車窓のフーガ（串田孫一君へ）＝尾崎喜八
駝鳥の失策＝串田孫一
富士見からの手紙＝串田孫一、古い日記を読みながら＝串田孫一、娘への手紙(六)＝尾崎實子、虹＝尾崎喜八、小鳥の本／花の検索＝串田孫一、富士見時代の「天気図リーフ」＝尾崎喜八、解説＝尾崎喜八、串田さんの山の文章＝尾崎喜八、交友抄／無題（ノートより）＝尾崎喜八、尾崎さんの山歩き＝串田孫一、二十年前の春＝串田孫一、尾崎喜八さんの山と詩＝串田孫一
尾崎喜八への旅　その三＝伊藤海彦
できごと／編集室から

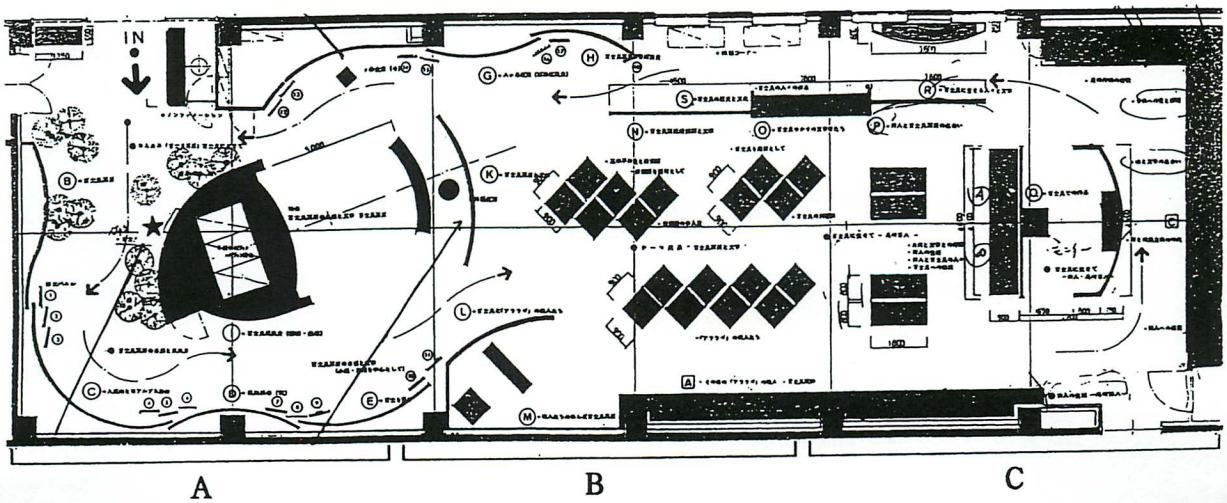
富士見町・尾崎喜八記念施設についての進行報告

前号でもお知らせいたしましたが、平成六年十一月に開館予定の富士見町コミュニティプラザの中に尾崎喜八の展示施設を作る計画についての具体的な「工事内容」が、町教育委員会から尾崎遺族に提示されましたので、以下にご案内申し上げます。

まず、二階のフロアの内三〇〇平米を尾崎の展示施設に充てるという計画は大幅に改変されて、フロアの三分の一程度に縮小されることになったようです。

ただし、このフロア全体（おそらく「自然と文学の森」という名前が付く）のイメージづくりに尾崎の詩を使っていこうという計画のようで、フロアの要所に尾崎の富士見についての作品が三つ掲示されることになりました。たとえば入口（図面左端★）には富士見の詩碑にもなっている「富士見に生きて」（本題〈土地〉）の碑文の複写を、◆印は八ヶ岳の全景の展示セクションですが、ここには『夕映えに立ちて』からの抜粋を、●印は映像展示「富士見高原の自然と文学」の壁に『花咲ける孤独』の一篇を、それぞれ展示するようです。

下段に載せましたフロア全体の図面について、教育委員会から口頭で受けた説明に基づいておおまかにご案内しますと、展示は、図面の下に付けたＡＢＣの三つのセクションに



分けることができるようです（この区分は当方で便宜上付けたもの）。

A：富士見高原の自然と文学を視覚的に紹介。映像、写真中心のコーナー。

B：「富士見高原と文学」を中心とした展示。テーマ展示として富士見に集った文人墨客を紹介。アララギ派、正木不如丘、他。

C：富士見に生きて――詩人・尾崎喜八――Bの一部としての尾崎のコーナー。

このCのコーナーは、次のように構成されています。

①詩人と富士見高原の出会い
（遺品、資料の展示）
自然と文学の対話／詩人の生涯／詩人と富士見の人々／富士見への回想

②富士見での作品
（富士見時代の詩作の展示）

③詩人の生涯
（当研究会が提出した「基本構想」を元にした尾崎の文学的生涯の展示）

④映像展示

これらの展示のために、尾崎遺族並びに研究会からは、尾崎自身撮影および所蔵する写真百二十余点を始め、寄贈品以外にも多くの資料協力をしております。当方としては、限られた条件の中ではあっても、尾崎の仕事の全体像が、観客に共感をもって迎えられるような展示になるように、協力、助言を続けております。開館の折りにはどうか是非ご来観くださるように、お願い申し上げます。

（石黒敦彦）

平成五年のできごと

蠟梅忌　毎年二月に行われてきた蠟梅忌は当年に限って四月十一日東京青山青山荘で催された。お話は安川定男氏の「尾崎喜八を偲ぶ」、中原好文氏の「シャルル・ヴィルドラックの書簡から」、重本恵津子さんの「詩人の妻実子夫人」があり、録音テープにより詩人の声を聞く。食事後、岩波書店編集者塩尻親雄氏から岩波文庫『山の絵本』の紹介、山崎猛館長から「北のアルプ美術館」の紹介、富士見町教育委員長加々見一郎氏から富士見町で建てるコミュニティプラザの進行状況報告、尾崎研究会からの報告等があり、実子夫人の米寿を祝って花束贈呈があった。参加者八十三名。司会は川嶋利哉・伊藤和明両氏。

岩波文庫『山の絵本』　五月十七日発売。昭和十年朋文堂刊の初版と同じ写真十一葉が入り、串田孫一氏の解説、初出一覧、山名索引が新たに加わり、カバーにはヘッセの水彩画を用いた美しい文庫本となった。

第六回みずならの会　六月四日から六日、奥秩父金山平有井館に二泊する。尾崎は昭和六年六月河田楨氏とともにここを訪れ、瑞牆山、金峰山に登り、のちに散文「花崗岩の国のイマアジュ」詩「金峰山の思い出」を書いた。木暮理太郎氏の碑を見、健脚組は瑞牆山登山、その他は富士見平まで行く。早朝のバードウォッチング、夜の月蝕の観察。参加者三十二名、幹事石田二三夫氏。

詩碑「田舎のモーツァルト」碑前祭　六月十二日、安曇野にある穂高中学校に於て同校同窓会主催で行われた。穂高町町長の挨拶、研究会側からは名取正人氏挨拶、同校生徒有志の合唱が流れる。式後白馬連峰一望のグラウンド脇で会食。

東京私立城北高校グリークラブ演奏会　六月二十七日、同校の委嘱作品多田武彦氏作曲の「尾崎喜八の詩から　第Ⅲ」が本邦初演で演奏された。作曲された詩篇は「安曇野・和田峠・夏雲・馬籠峠・夜をこめて」の五篇。高校生は「夜をこめて」が気に入っているとの事。

メンネルコール広友会富士見で歌う　八月二十八日、富士見町グリンカルチャーセンターに於て男声合唱演奏会。多田武彦氏作曲の「故地の花」「かけす」「尾崎喜八の詩から第Ⅱ」（郷愁・盛夏の午後・田舎のモーツァルト・夕暮の歌・野辺山ノ原）が歌われた。会員増田博氏によってパンフレット『尾崎喜八にちなんで』解説と詩」が作られ会衆全員に配られた。盛会であった。

詩碑「富士見に生きて」碑前の集い　八月二十九日、富士見町尾崎会主催の恒例の碑前の集いが行われた。中山政市代表の挨拶の後、晩夏の風の下で尾崎の声の録音を聴き、植松教育次長の尾崎展示施設の報告があり、三井為友氏、重本恵津子さんのお話、広友会全員での献歌。つづいて席を改め懇親会。

校歌作詞者作曲者の表彰　十一月十三日、福島県立磐城農業高校では創立五十周年記念行事の一つとして、同校同窓生が誇りと愛着を

もって歌う校歌の、作詞者・作曲者を表彰するという企画によって遺族が招かれて記念式典に参列した。

以上は行事であるが平成五年は尾崎没後初めてと言ってよい程、尾崎の記事が雑誌・新聞に登場したのでご紹介する。それ等には機会ある毎に会員諸氏が尾崎の事を語り、筆にして下さる心遣いが感じられて有難い。

・『家庭画報』9月号、甲州金山平・秋の特集。詩二篇、散文(抄)。みずならの会の縁で幹事石田二三夫氏に相談が持ちかけられた。

・『科学朝日』11月号、「むかし昆虫少年だった岡田朝雄のクジャクヤママユ」の中。写真と岡田氏の言葉。

・『銀花』'93年冬号、特集「高嶺の花」で十頁にわたって写真及び詩、筆者伊藤海彦氏。

・十一月四日　朝日新聞「天声人語」。

・十一月十三日　ハインリッヒ・シュッツ合唱団設立二十五周年記念演奏会パーティー席上で野本元氏はシュッツ音楽と尾崎の関わりについて話され、詩「ハインリッヒ・シュッツ」の尾崎自作朗読の録音を披露。

・十一月十五日　毎日新聞夕刊「うたの里を行く」欄、美が原。

・十一月二十五日　東京新聞夕刊「同人・結社誌から」欄で〝尾崎喜八資料〟9号の紹介。

・十一月二十六日　信濃毎日新聞「詩歌しなの路」欄で詩「美が原熔岩台地」。岩波文庫『山の絵本』の内容と美が原についての作家垂水理恵氏の随想。

・十二月一日　江ノ電沿線新聞「尾崎喜八の冬の詩――その富士見時代の作品から――」伊藤海彦氏。

・関連図書　『高原の音楽譜』手塚宗求著恒文社刊。NHK「私の本棚」で朗読された。『愛鳥自伝』下中西悟堂著平凡社ライブラリ。復刻版雑誌「詩と音楽」久山社刊。別巻安川定男解説（白秋との関連事項）。

最後に今まで行われてきた尾崎喜八を主題にした講演、詩のゼミナール、読書会等をご紹介する。

・昭和六十三年鎌倉市に於てひらかれた詩の講座七回の内の一回、講師伊藤海彦氏。

・同年から鎌倉市公民館に於て詩のゼミナール、伊藤海彦氏。

・昭和六十四年鎌倉文学館に於て講演「詩人の肖像」講師伊藤海彦氏。

・平成三年より富士見町公民館に於て二年間に亘り詩を読む会、題材『自註富士見高原詩集』、指導小池久美公民館長。

・右につづき、平成五年春から『美しき視野』の読書会が行われている。

・平成五年十一月三十日鎌倉ロータリークラブで「詩人の肖像」講師伊藤海彦氏。

編集室から

本号は、私たちの「資料」の十号目にあたります。研究会発足以来の十年間を支えてくださっている会員の皆様方に心からお礼を申し上げます。皆様のご助力によって、そのまま放置すれば埋もれてしまう尾崎喜八の貴重な未刊行資料の公表、新事実の研究、発掘などが可能になっています。今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

今後の予定としては、もう少し「研究」やインタビューも強化して、これまで未調査だった尾崎喜八の仕事の周辺までも掘り下げようと思います。いつも貴重な未刊行資料の研究をしてくださっている嘉納忠明氏は、北川太一氏のご協力を得ながら「尾崎喜八と高村光太郎」という大きなテーマに着手されています。またこれまで未着手の、寺田寅彦、中谷宇吉郎、藤原咲平など科学者たちの自然観と尾崎喜八の仕事との関係も、文献だけでは調査、立証の困難な課題です。こうしたものも今後取り上げていこうと思います。資料提供、寄稿など、ご協力いただければ幸いです。

なお、前号でも触れましたように、次号から研究会費を値上げさせていただきます。それに伴い、郵便振替の振り込み料は研究会負担といたしました。小冊子の代金と考えれば決して安価ではありませんが、その分をこのような研究活動の充実に向けてまいりますので、どうかご寛恕ください。

（石黒敦彦）

尾崎喜八資料・第十号
一九九四年二月四日発行・非売品
ISSN 0911-3339
発行　尾崎喜八研究会
鎌倉市山ノ内一九七―五一（〒247）
電話　〇四六七―二三―一七六一
振替　横浜7-3301 2尾崎喜八研究会
印刷　住友出版印刷株式会社